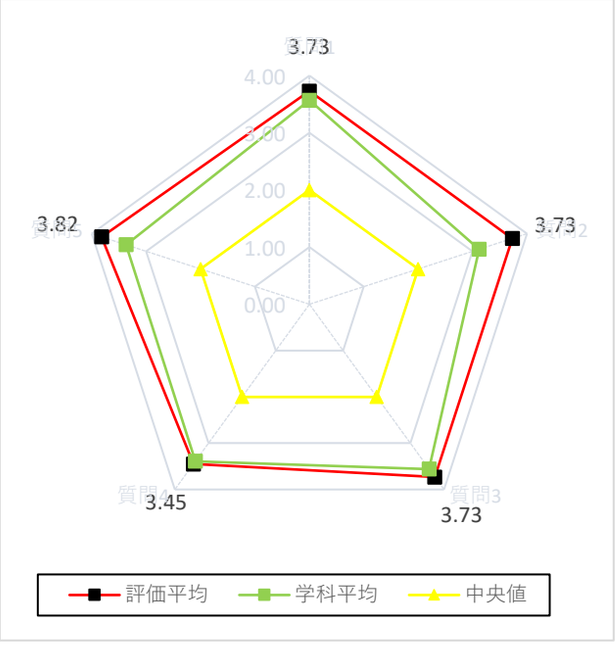
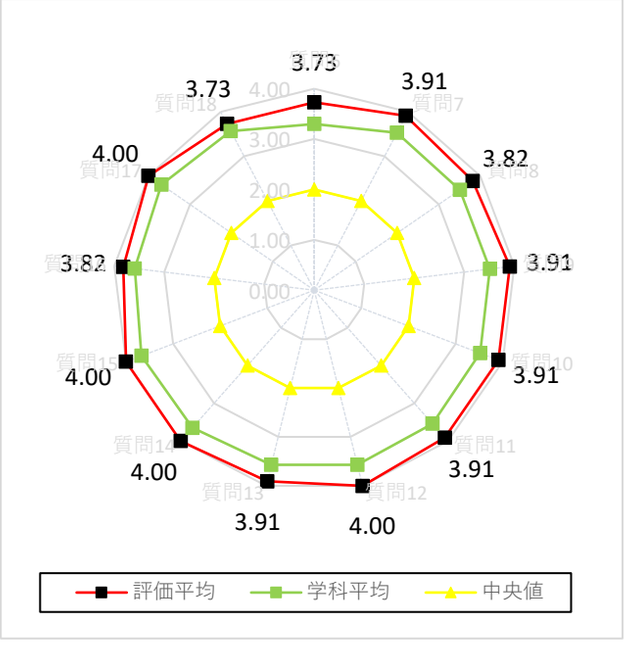
学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		あすなろうⅠ　基礎（初年次教育含）	14名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

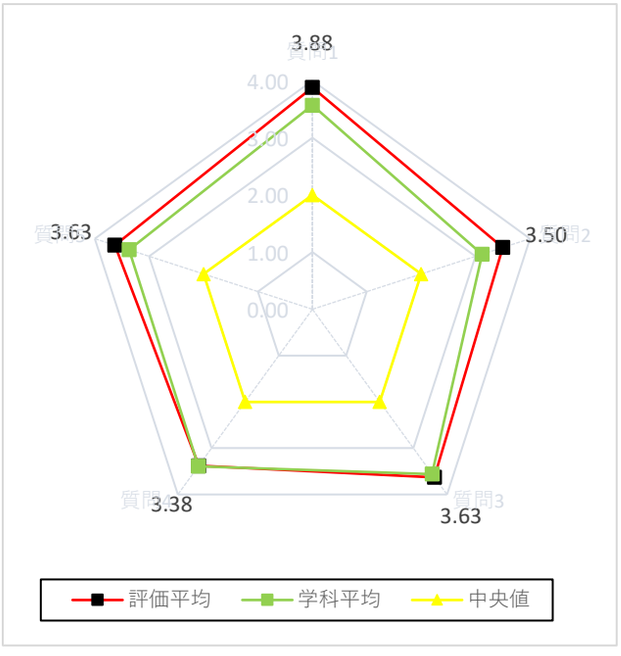
質問12、14, 15、17, 18については満点。平均点より低いのはない。しかし質問18の総合評価はあまり高くない。

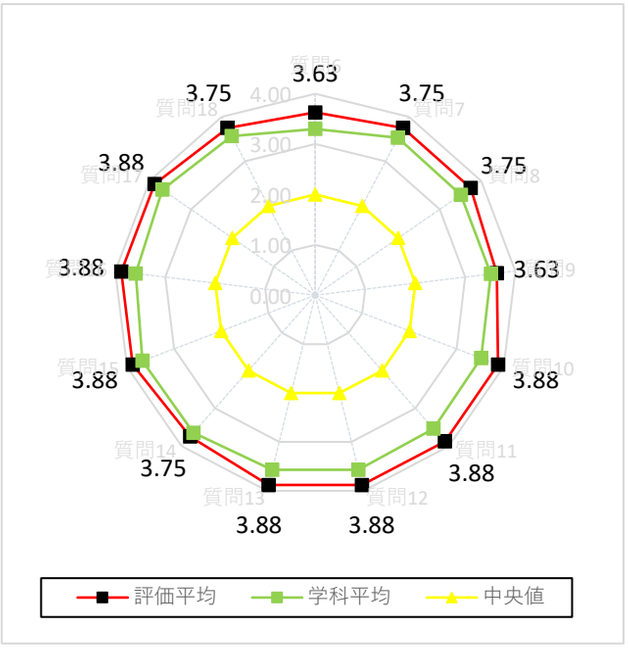
（３）次年度に向けての取り組み

1年生はまだ高校生気分が抜けていなくて主体的に学ぶことができていない。自主的、自発性、能動的、に欠けている。授業へ積極的に学ぶ態度や姿勢を指導したい。グループワークが数コマあるのでこの時間帯に指導する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		あすなろうⅠ　基礎（初年次教育含）	12名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

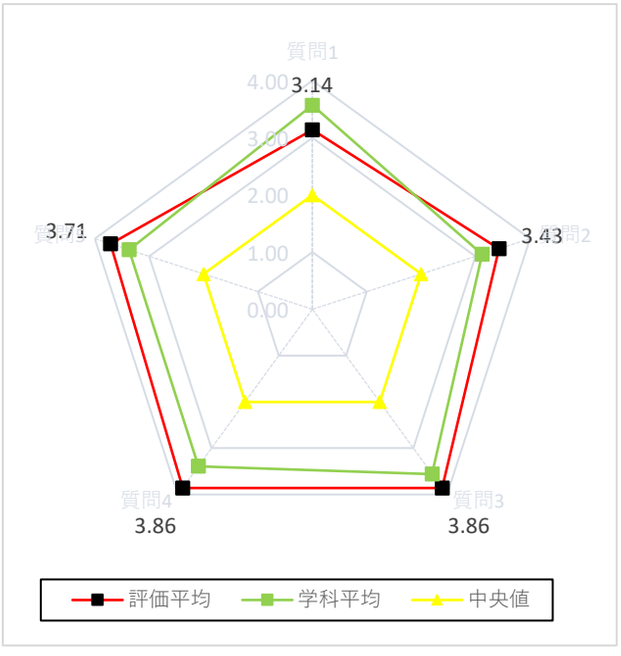
あすなろう１の授業に関しては、ほぼすべての項目において評価平均よりも高い評価が得られた。
一人ひとりの学生の表情や状況等を確認しながら双方向の授業を心掛け誠実に対応した結果であると考える。

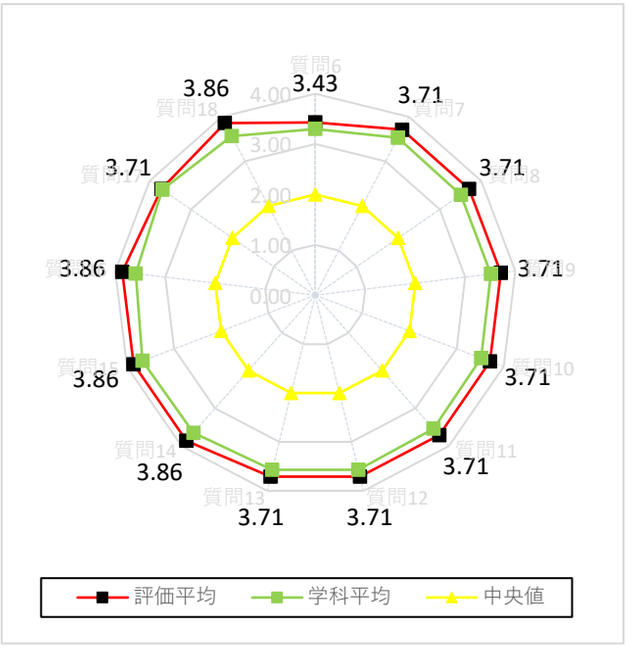
（３）次年度に向けての取り組み

今年度は学生の質問時間をしっかりとり、対応していきたいと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		あすなろうⅠ　基礎（初年次教育含）	12名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

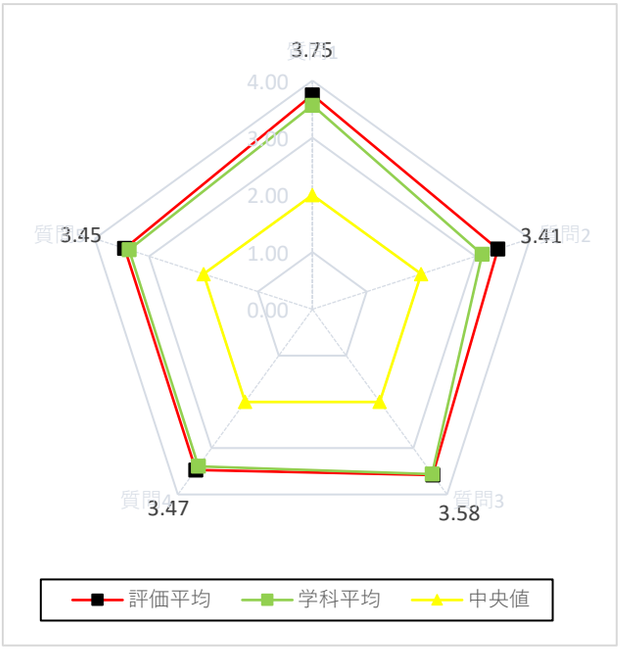
質問1・6が学科平均を下回った理由として、通年科目であり学年全体でのシラバス説明以後、担当学生のみに対してのシラバス説明を行っていないこと・前期についてはポータルサイトでの課題による遠隔授業中心となりシラバスの修正説明が不足していたこと・ネット環境不良による欠席が考えられる。
その他の質問項目は学科平均を上回っているが、少人数グループ活動であり、学生自らが積極的に行動し取り組むことが必要な科目であること、ボランティア活動から得たものが大きかったと思われる。質問17については、後期は3年次臨地実習指導と専門科目講義により、開講日は大学不在であり授業時間に学生に接することが全くできなかったことが原因である。

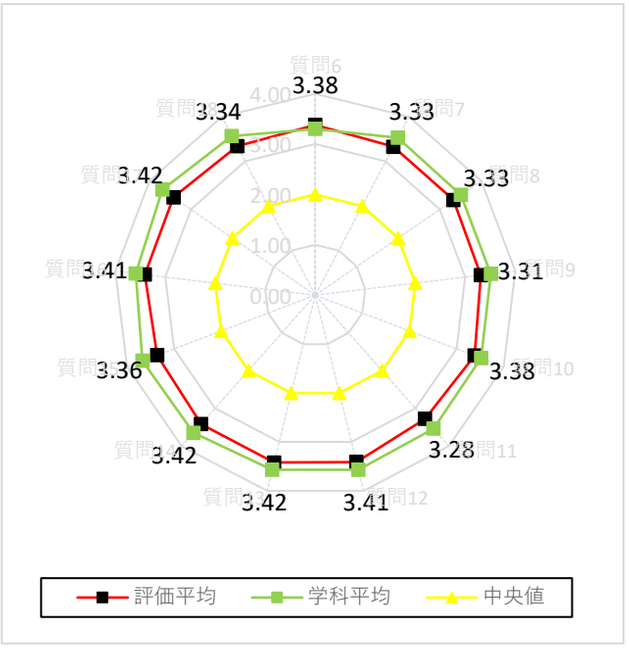
（３）次年度に向けての取り組み

臨地実習や他学年の担当講義を考慮した、あすなろうⅠの担当教員の検討が必要である。また、講義日に不在となる場合は、メールなどを活用し学生の動機づけを行う必要がある。入学初期にはネット環境の安定や遠隔講義に慣れるまでの細やかな指導が必要である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		あすなろうⅢ 臨地協働	88名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

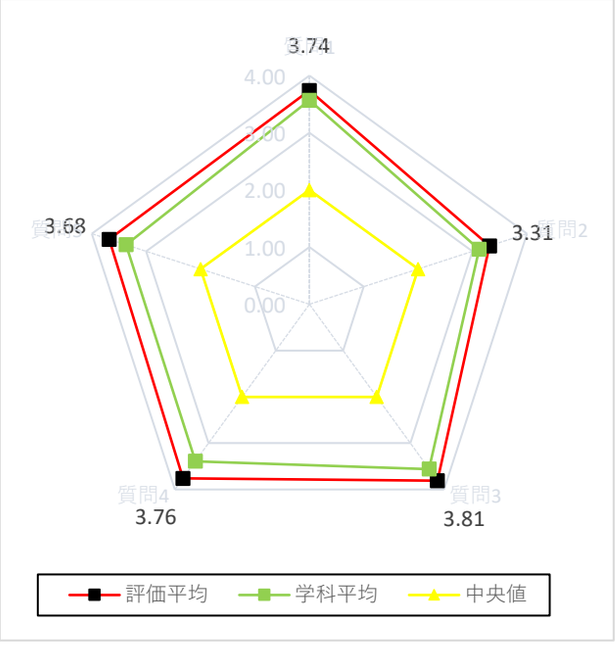
64名の回答があり、平均3.42であった。
臨地実習に向けて、地域調査と技術演習（成人・老年・母性小児等）を行った。
前期はオンライン・オンデマンドの遠隔授業での講義・説明を入れながらで、グループワークができずに地域調査を行ったが、
それぞれのグループで役割を分担しながら結果をまとめていたが、点検が不十分であった。
情報共有も学内の廊下掲示板を活用したが、最終的には学内実習になることが多く、活用は半減する結果となった。
技術演習は事例をよく検討し、実践場面の模擬患者による援助技術のロールプレイは真剣に臨んでいた。
これらを通して実習の心構えはより具体的にそれぞれの学生ができてきた。

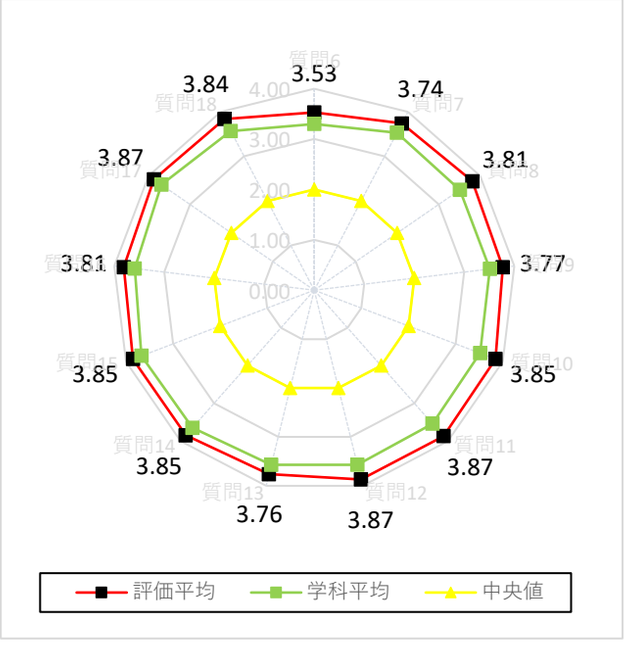
（３）次年度に向けての取り組み

心構えのレポーは何度も繰り返し書くことになったので、スケジュールを検討したい。
次年度は実習場所の情報が多少得られたので、先輩や教員からの情報も活用するよう伝える。
臨地実習前の技術演習では緊張感があり、準備学習等の方法も分かってきて、準備ができてきたと思われる。
次年度は4学年揃う関係から、教員・実習室およびプログラムの調整を行いたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		統計学の基礎	65名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

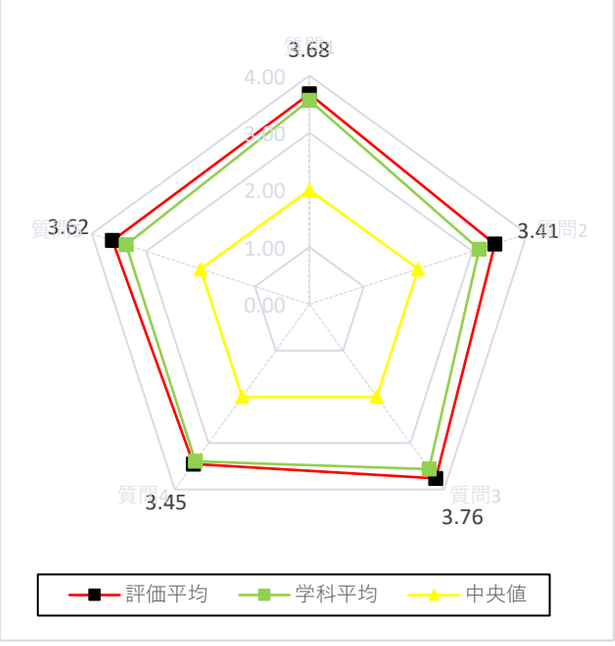
今学期は看護学部で統計学の講義を行った。前半は統計理論を後半には国試「統計」向けの内容で対面講義を行った。
前半はオンライン講義で終盤になって対面講義が再開された時点でオンラインの内容の総復習を行った結果、今回の学科平均以上評価になったと思われる。

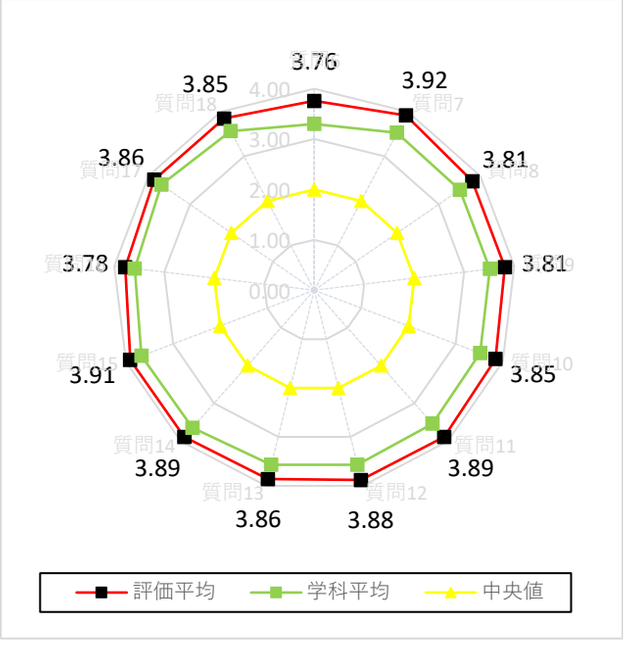
（３）次年度に向けての取り組み

来年度は複数の学部の合同講義になるので、看護学部生向けには工夫を要すると思われる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		情報処理入門	77名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

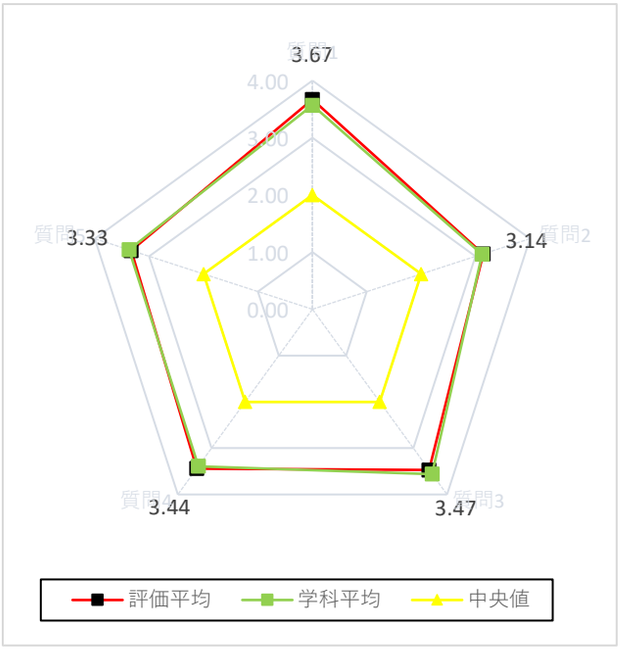
結果より、概ね良い評価を頂いていると考えられる。
その中でも、質問４については、低い評価になっていることが特徴であると感じる。この設問は、「授業を理解するために学生自身が工夫しているか」を訪ねている設問であるため、学生がこの講義で理解を深めるために、工夫したことがなかったことがわかった。

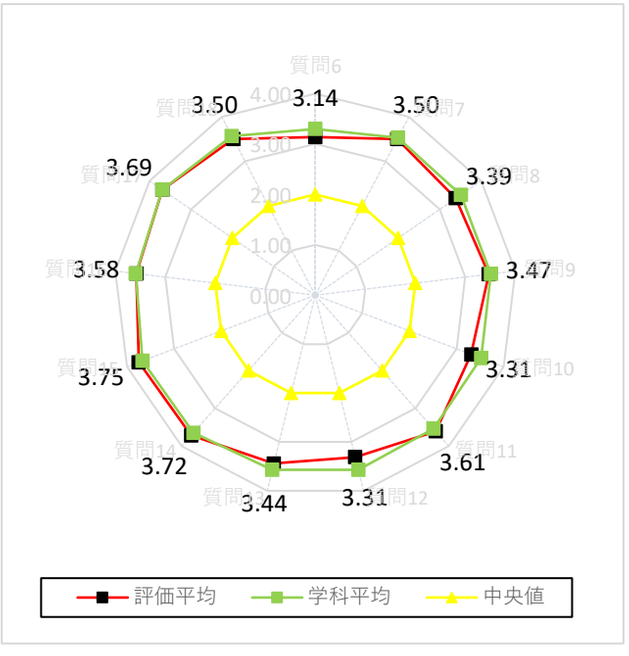
（３）次年度に向けての取り組み

上記の分析と評価を踏まえ、来年度においては、学生が理解を深めるための工夫を行うような仕組みづくりが必要だと考える。
具体的には、課題や宿題を設定する際に、工夫を行っていきたいと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		病理学	79名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

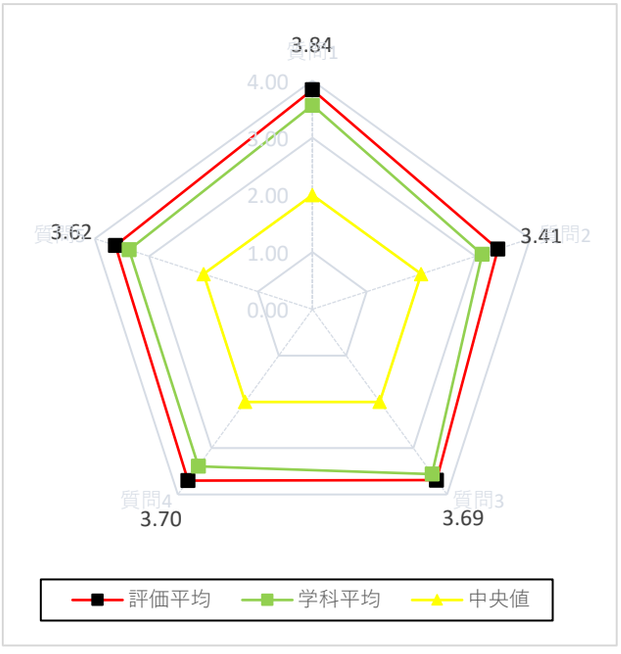
学生のコメントとして、パワーポイントは分かりやすかった。資料、教科書、補足説明のプリント、ホワイトボードでの補足説明などもわかりやすくて良かった。また、毎回の小テストは復習できて良かったとポジティブな評価を得ている。しかし以下のような問題点を指摘されているので改善が必要。
1) シラバスの説明について私のプレゼンがよくなかったのかあまり評価されていない。
2) 授業の到達目標の説明が分かりにくかったのか、評価が平均以下になっている。
3) 板書の際、ホワイトボードの位置が悪いこと、消すタイミングが早すぎるなど、クレームがあった。
4) 以前から声が明瞭ではないとの指摘がある。改善に向けた努力が必要。
5) zoomを使ってのパソコンの扱い方に習熟していず、もたつくので時間がもったいないとの指摘がある。

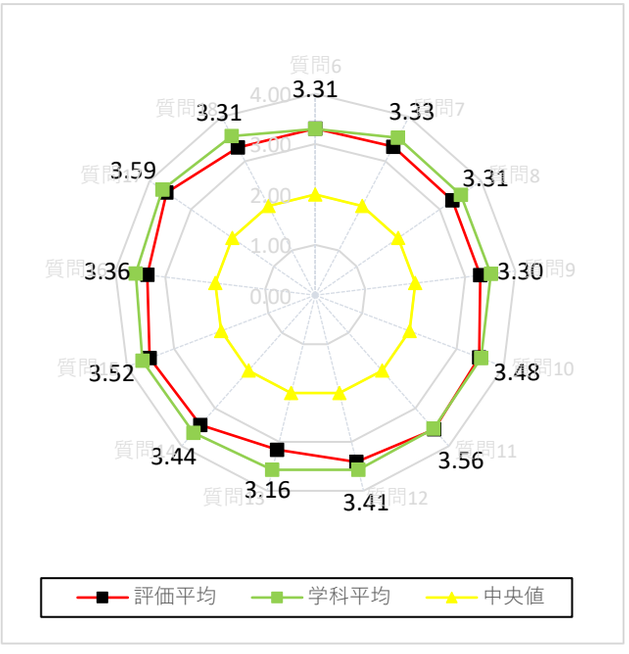
（３）次年度に向けての取り組み

パワーポイントを使った講義内容、資料、教科書、補足説明のプリント、白板での補足説明など評判は良いので続行する。また小テストも評価受けているので次年度も基本的に同じように行う。
評価結果を受けて、以下の改善を行う。
1) シラバスの説明について、具体的に要領よく説明する。
2) 授業の到達目標の説明は、具体的に要領よくのべる。
3) ホワイトボードの使い方として、ボードの場所、文字を明確に記載するなどに配慮する。
4) 講義に際し、滑舌を良くする訓練を行う。キレの良い話し方を心がける。
5) Zoom、今年度はTeamsのパソコン操作に習熟し、授業がスムーズに進むよう努める。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		病態治療学Ⅲ（筋・骨格、感覚器）	96名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

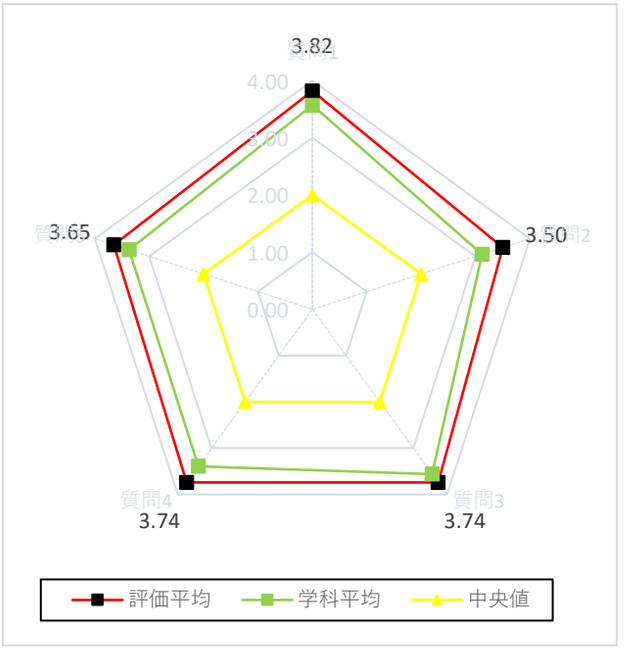
・本年度はコロナ禍対応のため、かなり変則的な講義形態だったため、学生自身への復習・自修の負担が大きかったかと思われる。
・担当内容が、複数の領域にわたるため（教科書４冊に分散している）適切な教科書の指定が難しく、マニュアル・教科書がないと対応できない世代の学生には対応しづらい教科かと思われるので、講義内容の担当割の整理をする必要があるかもしれない。

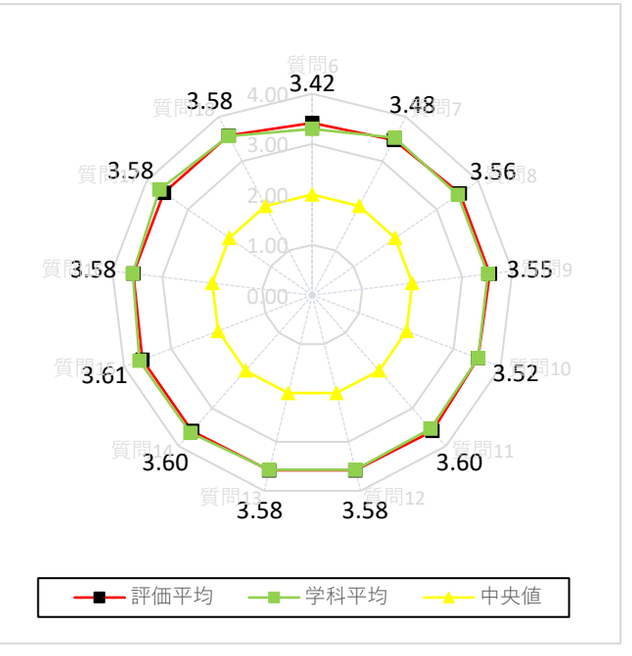
（３）次年度に向けての取り組み

・（担当内容が本年度と同じと仮定すれば）配布資料の内容を可能な限り教科書レベルまで引き上げたものを準備する。
・リモート講義になった場合は、対面講義の内容全てをリモート講義でカバーするのはかなり難しいため、内容を削減して行う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		病態治療学Ⅳ（神経・難病、精神疾患）	99名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

3名の教員によるオムニバス授業である。各教員がそれぞれ工夫しながら遠隔授業を実施した。
学生のアンケート解答率は63%であった。
全ての項目において、学科平均と同じくらいの結果であり、特に問題点は見当たらない。

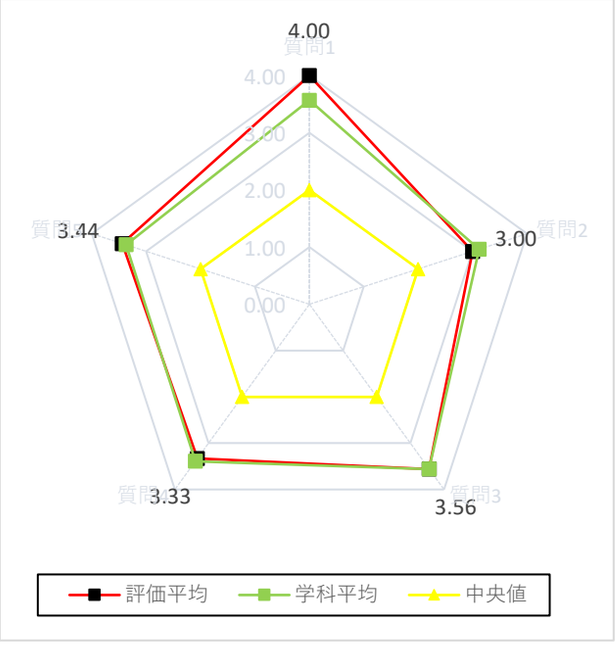
自由記載からの抜粋「遠隔授業でしたがとても分かりやすかったです！」
庄野先生：「学習ノートを用いての授業だったので、これからも復習がしやすいと思いました。」
「ノートの裏側に練習問題をつくってくれていて、授業後にとくことで理解が深められました。」
小山先生：「動画での授業でしたが、ポイントを教えてくださって、とても分かりやすかったです。」
「確認テストを行うことで理解を深めることができました。」
佐藤先生：「小テストを行うことでいろいろ調べる機会をいただき理解を深めることができた。」

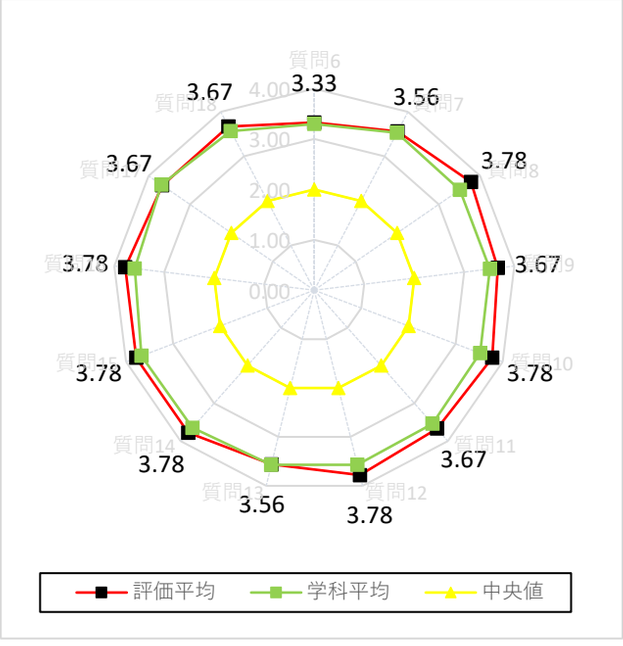
（３）次年度に向けての取り組み

R3年度も各教員が引き続き学生の教育に尽力する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		リハビリテーション学	12名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

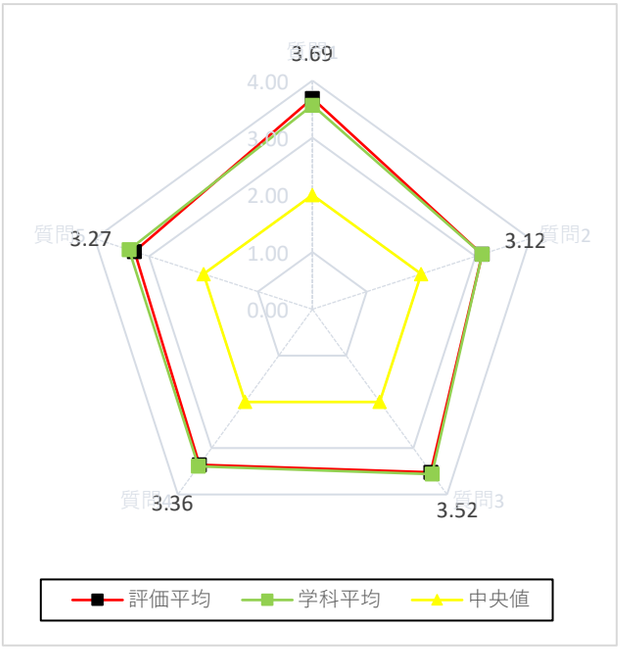
学生からの科目の評価は、3.62±0.23/4点であった。内訳は、学生自身の科目への取り組みについての評価は3.47±0.36/4点、講義方法への評価は3.68±0.13/4点であった。評価が低かった項目は「あなたはこの講義を理解するために自分で何か工夫しましたか？、平均3.33点」であった。

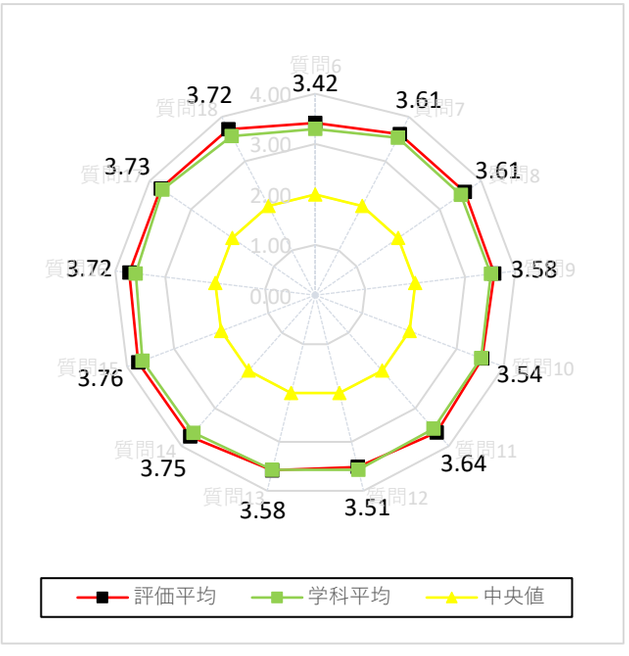
（３）次年度に向けての取り組み

学生自らが学修に取り組む工夫が少なかったと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		フィジカルアセスメント	96名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

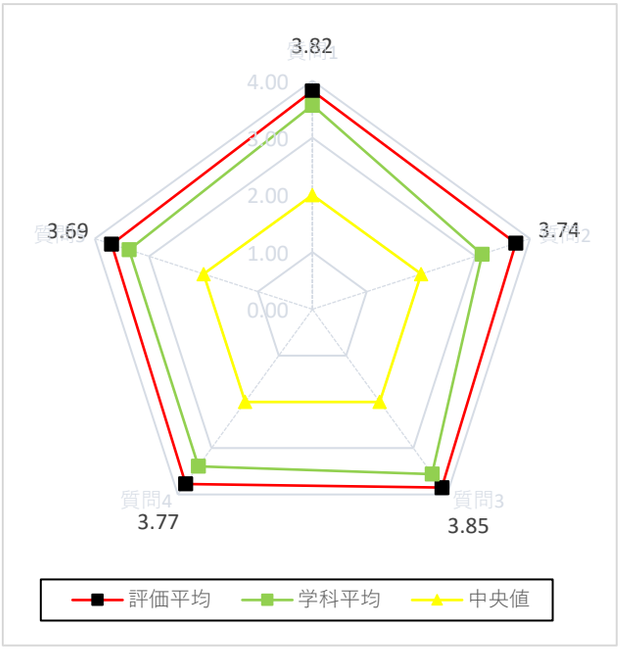
前期開講科目であり、新型コロナ感染症対策として第1回講義から遠隔授業（MoodleによるPPT講義）となったため、導入の不十分さや学生のネット環境不十分などから質問2・6・12が学科平均を下回った。その後、Moodlだけではなくzoomによる遠隔授業を行ったが、2コマ連続での遠隔授業は集中力に欠ける・チャットやマイク機能で学生の反応を確認することの限界があり質問3・4・12が学科平均を下回った。その他の質問項目が学科平均相当であった理由として、遠隔授業で動画だけではなく、人体模型や物品を用いながら講義をしたこと・講義後のリフレクションペーパーのフィードバックを講義後2日以内に行ったこと・メールでの質問対応を行った。また、感染防止に配慮して他学科とのコラボ演習を開講したことが要因である。質問18は学科平均を上回っているが質問5の学生自身の自己評価が平均を下回ったことから、今後は、積極的に学修できるように事前事後学習の工夫や遠隔授業での参加の工夫が必要である。

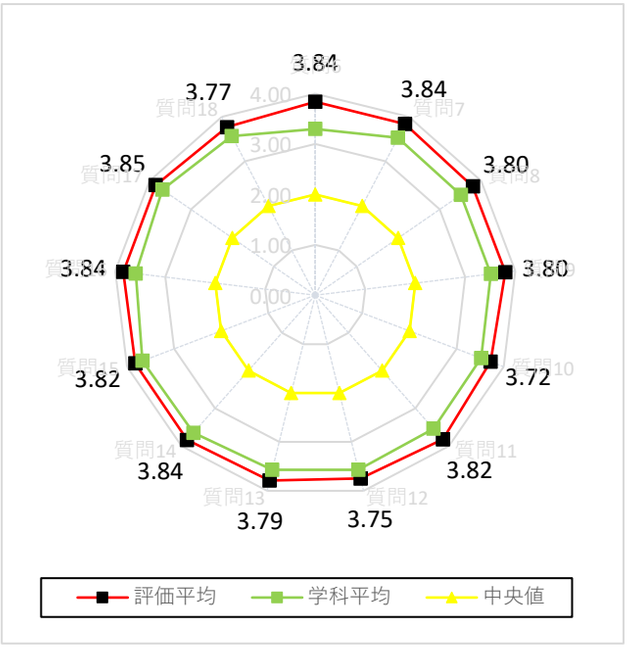
（３）次年度に向けての取り組み

2021年度は学生の動機づけと最終自己評価のため、第1回と最終回は対面授業を実施する。学生の疑問を解決できるようにタイムリーに対応できるようリフレクションペーパーのフィードバックとメールの活用は継続する。臨地実習で活用できるように演習授業の時間を確保し、他学科との連携を取った演習は継続する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		臨床関連技術論演習	96名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

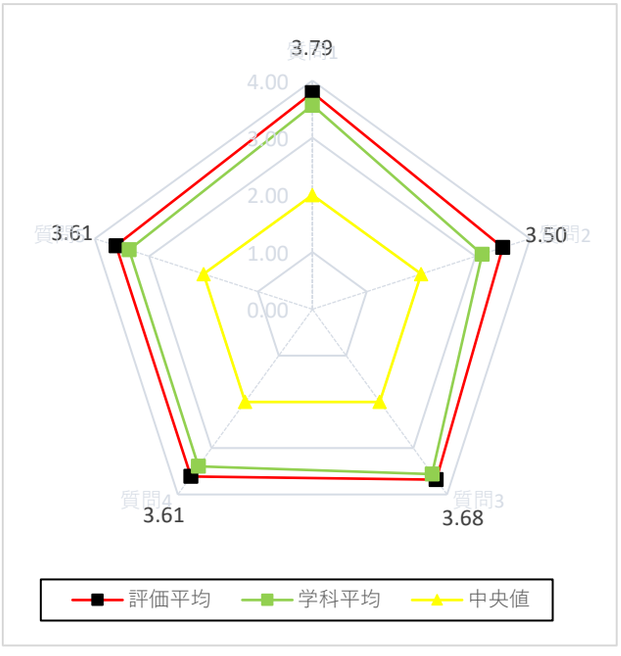
授業評価アンケートの回答率は64.2%であった。
全項目の平均値3.80であり、学科平均値（3.70）より平均値が高かった。よって、概ね学生のニーズに対応した授業であったと評価する。
ただし、学生の参加態度をあらわす、質問１～質問５の平均値が3.77と他のカテゴリの平均値と比較して最も低かった。要因は明らかにできないが、学生自身が予習－講義・演習－復習の学修サイクルにおいて、能動的な授業への参加ができていない点が影響していると推察する。
授業方法に関する項目については、平均値3.80であり高い評価を得た。コロナ禍で対面授業から遠隔授業への変更や学内演習方法の調整が必要となり、シラバス通りの科目展開はできなかったが、学生の授業への興味・関心を高め、授業内容の理解を促進するための工夫ができていたと評価する。教員の対応に関する質問14～質問17についても、平均値3.84であり高い評価を得た。学生からの質問事項に対して、ポータルサイトや学修支援システム（Moodle）を活用し、速やかなフィードバックを行い、学生全員で共有できるようにしたことで、学生への対応に関して一定の評価を得られたと考える。

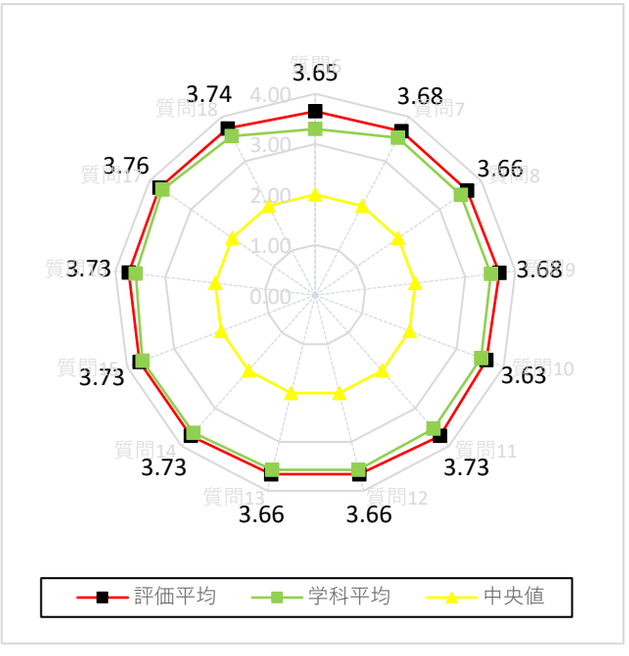
（３）次年度に向けての取り組み

１）学生が授業への能動的な参加ができるように、授業でのシラバスの活用やTeamsの学修支援機能を活用した事前学修の提示および確認、授業内容の理解への支援に引き続き取り組む。毎回の授業終了時に学実施する「授業カード」に記載された授業に関する感想や意見、質問事項について速やかに整理を行い、質問事項に対してはポータルメールや次の授業でフィードバックを行う。
２）臨床判断能力の基盤となる状況認識およびアセスメント能力の育成を意識した授業方法の工夫を行う。対象にあった安全・安楽・自立を考慮した看護技術の実践を行うために必要なアセスメント能力を育むため、事例とアセスメントに必要な情報を包含した状況設定を行う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		成人看護学概論	98名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

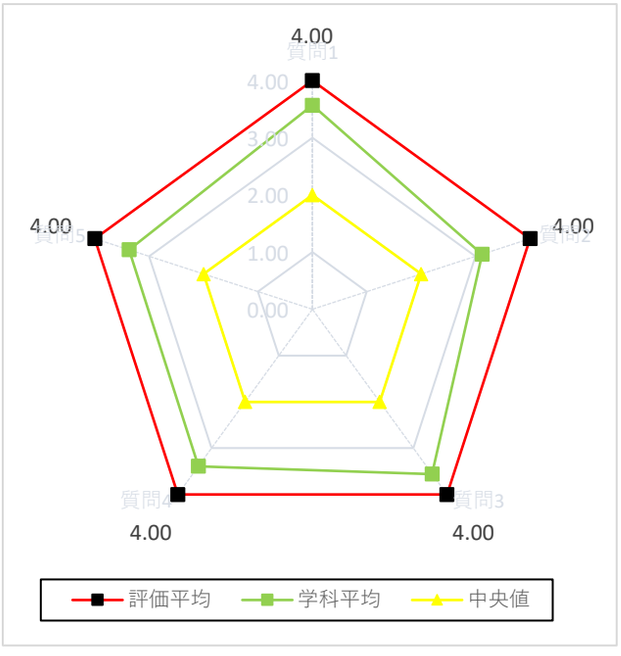
新コロナ感染対応で遠隔授業が開始となり、私自身が初めて取り組むことばかりでした。通信状況はうまくいっているのか、授業内容はわかりにくいのではないか等アンケートを取っては工夫するなど悪戦苦闘しながら取り組みました。このことが質問11（3.73）、質問14（3.73）、質問17（3.76）の評価となったのではないか、また最後の授業は、2コマとり、対面授業で全般のまとめをしたことが、質問9（3.68）の評価となったのではないかと考えます。今回の課題は、質問10（3.63）の評価にも表れていますが、私自身が遠隔授業での視聴覚機器の取り扱いが不十分であったことです。またこの授業は成人看護学がどのような学問であるのか等、概念・理論を取り上げます。それだけに授業時間90分の中で興味・関心が持てる授業内容の工夫がもっと必要であると考えました。

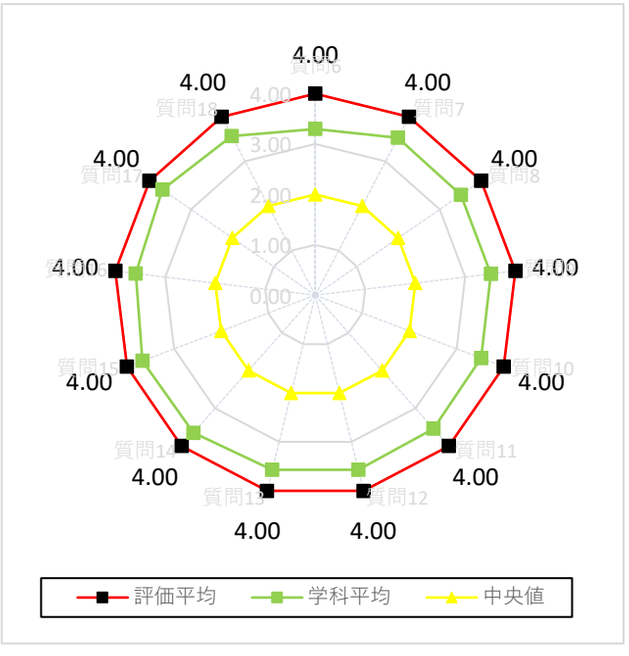
（３）次年度に向けての取り組み

遠隔授業を実施する中で、学生がわかりやすいように、また関心をもって授業に臨むことができるためには、私自身が①視聴覚機器の取り扱いを熟知すること、②事前学習に力が入れるような資料の配布をすること、③学生の質問や意見にはしっかり耳を傾けて対応していくことが必要と考えています。今年度も遠隔授業でスタートする可能性が高いことが推測されますので、この課題をしっかりクリアできるようにします。それに加えて成人看護学は、将来看護職の道を歩むためには、基本的な内容が多く含まれる科目です。看護職になるための動機付けができるように事例などを取り上げて、理解しやすい授業ができるように努めたいと思います。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		成人看護学方法論Ⅰ	97名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

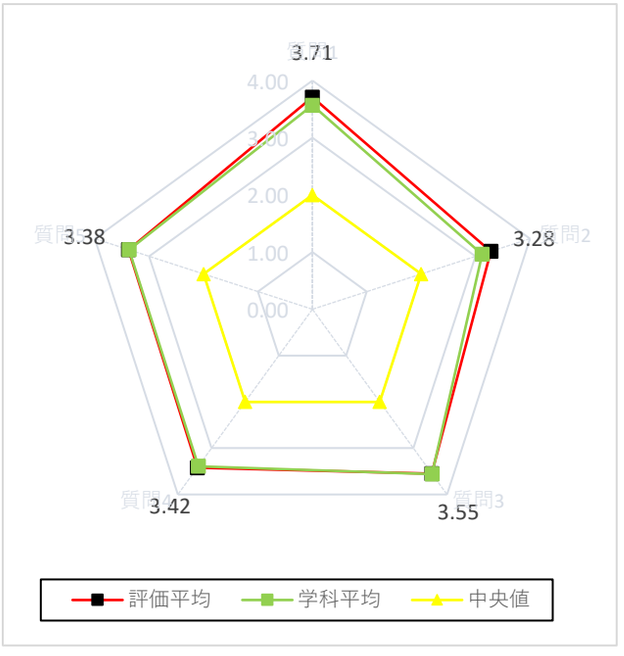
全ての質問項目で学科平均を上回る結果であった。本科目は、成人看護学急性期の中で周術期に特化して講義・演習を構成している。授業では、既存学習である解剖生理・薬理学の復習から始め、単に治療的側面からみた看護援助の解説に留まらないように工夫をした。具体的には、臨地実習で経験する可能性が高い疾患と国家試験出題頻度の高い疾患について、看護の側面から講義を展開した。また、学生は初めて聞く言葉や技術が多いため戸惑わないように、日常生活と関連付けた事例の説明や動画、使用する物品の現物提示を心がけた。質問やリフレクションペーパーのフィードバックは短期間で行えるように心がけた。今年度は感染対策上、対面での演習が行えず、机上レベルの演習となったことが残念である。

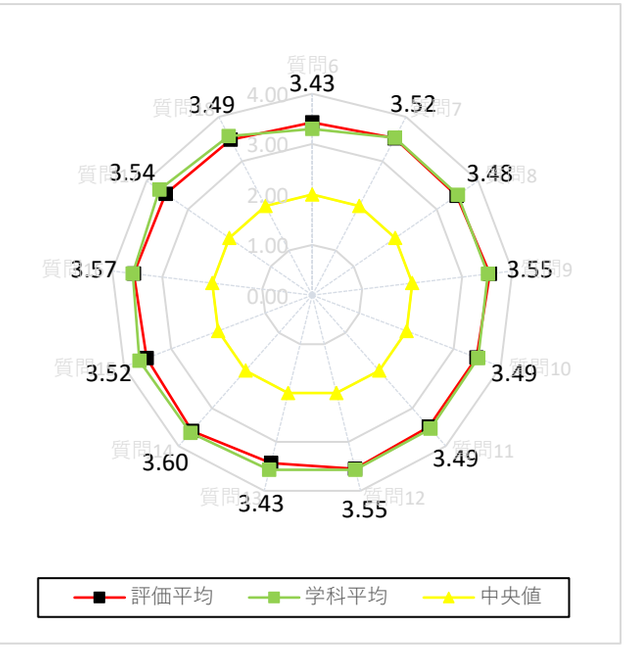
（３）次年度に向けての取り組み

既習学習の確認（復習）は、今年度同様に小テストや動画を活用する。単に看護援助の解説とならないように、看護の視点で看護過程に即した講義を展開する。感染対策を講じた上での対面での演習を行う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		成人看護学方法論Ⅱ	88名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

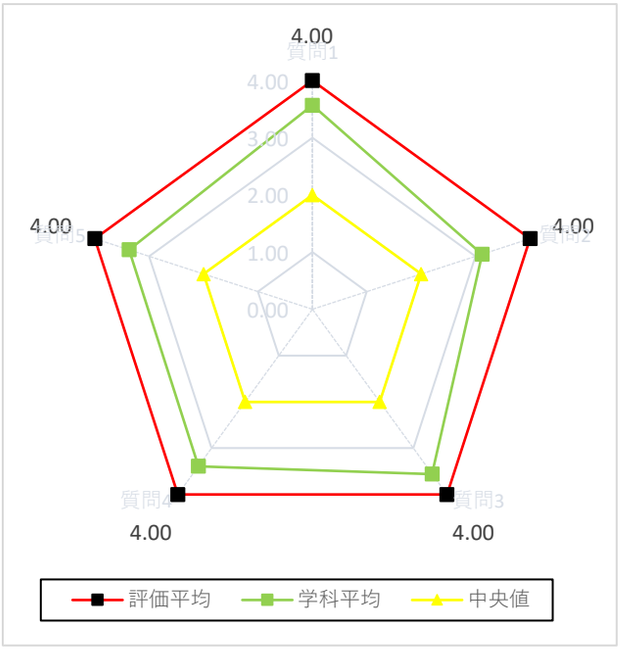
遠隔授業が中心となった科目であるが、学生が提出した事前学習・事後学修ポートの内容や評価を授業に取入れたため、学生は関心が高く集中した授業となった。演習においても実習や卒業後に活用する技術や看護過程の展開であり、学生も内容のあるレポートを作成しており、授業に活用しやすく、成果があった。
音響設備の不具合が多く、学生への教育上の不利益が生じていた。遠隔授業を進めていくうえで、事務サイドの教育環境づくりが遅れていた現状があり、今後の課題である。また、教室の直前の変更も多く、この点においても検討が必要である。

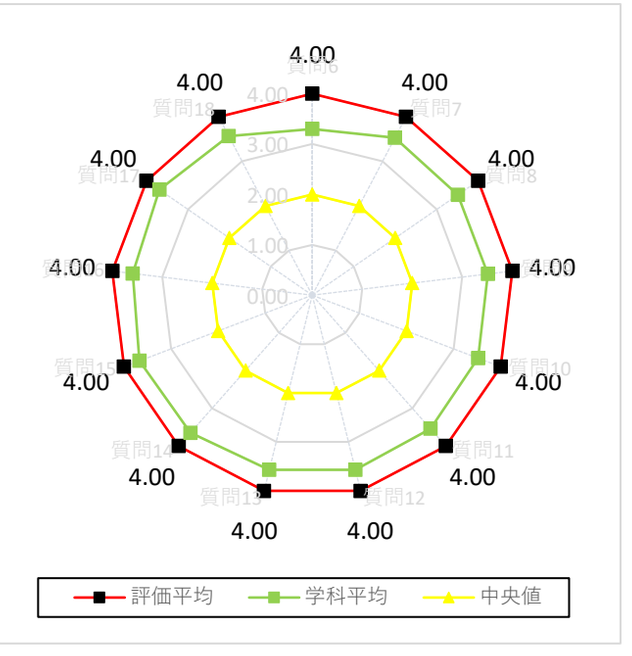
（３）次年度に向けての取り組み

今後、慢性疾患を持つ患者の看護の社会的ニーズは高くなると考えられ、知識の活用、思考力・判断力の育成に向けて学生参加の授業改善を試みる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		看護診断論	96名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

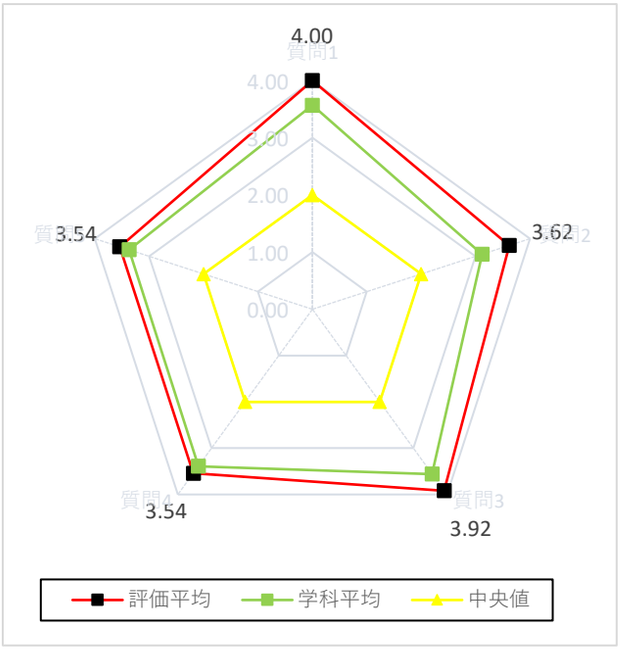
全ての質問項目で学科平均を上回った。看護診断論は看護過程の構成要素のひとつであることを意識して、前半は看護過程の知識の確認及び診断の必要性を強調して講義を行った。後半では臨地実習で活用する頻度の高い類似する看護診断について、何が異なるのかを学生自身が調べ、グループで検討し発表するアクティブラーニング学修を行った。この結果、学生からは「看護過程と重なる部分があり復習になった。実習で活用できそう」との評価を得た。
しかし、看護診断論の本来の目的は、理論について学修を深めるため複数の理論家の考えを理解し、学生なりの新たな知見を見出すことである。2019年度より学生のレディネスに合わせて、シラバスを修正し看護過程の中の看護診断の位置づけで講義を行っているが、本来の看護診断論としての講義内容が検討できるように、他の専門科目との調整を図る必要が今後はある。また、8回の集中講義ではあるが、2019年の3日間連続開講から間隔をあけて開講することで受講しやすかったと考える。

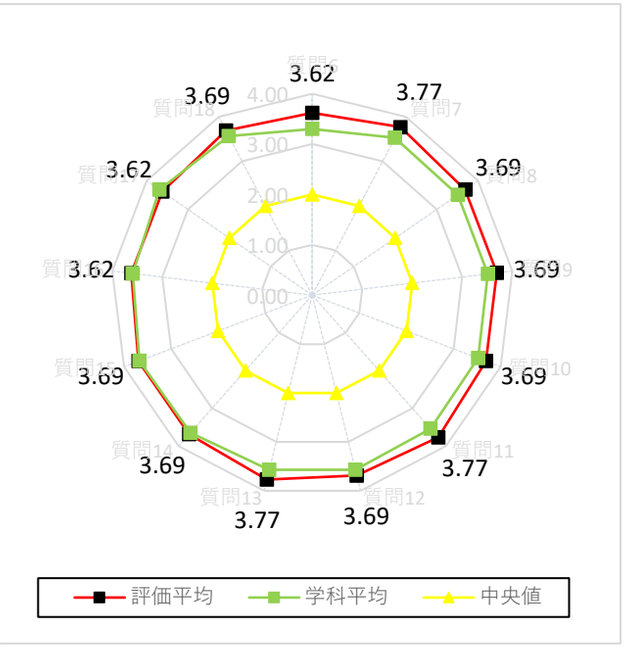
（３）次年度に向けての取り組み

学生のレディネスを把握しシラバスを修正する。学生の学習進度に合わせて開講時期を検討する。学生の学習進度に合わせて、提示する看護診断を決定することが必要である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		成人看護学実習Ⅰ	88名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

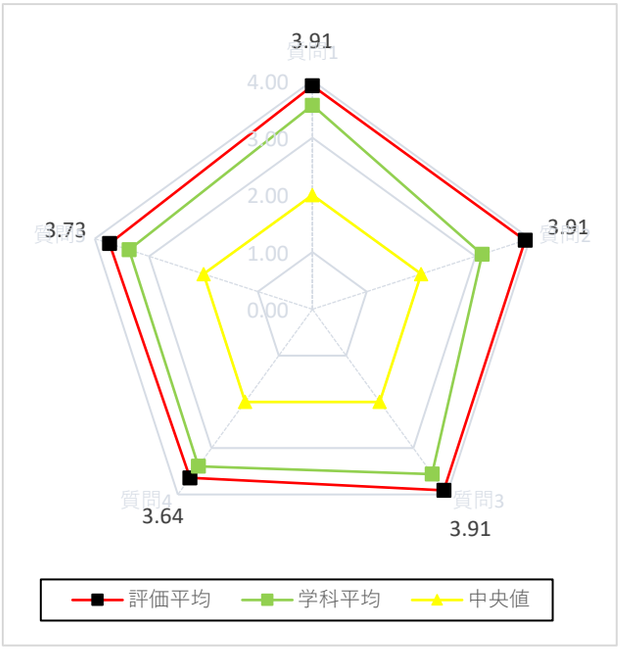
臨地実習ができたのは22Ｇの中で12Gの48名が3週間の臨地実習ができ、その他のグルｰプは、病院からの実習中止で学内実習【シュミレｰション教育】を実施しました。学内実習においても、臨地状況に即した場面展開を行う為に、スキルスラボシュミレｰションルｰムで模擬患者は教員が行い、術前から退院までを疑似体験しながら、異なる2事例を展開するなど内容量を多くしました。臨床実習では急速な看護展開をすることから難しい問題もあることは考慮しながら、場の違いはありますが、同じルーブリック評価表で評価することにしました。欠席する人はいなかったことや実習中の態度が真剣であったことが質問1（4.0）質問3（3.92）からもうかがえます。質問7（3.77）質問11（3.77）質問13（3.77）にもかかわらず、質問5（3.54）総合自己評価や質問16(3.62）質問17(3.62）については少し低い評価です。学生個々と向き合って、何が良くて何が悪いのか、どこが達成できていないのかなどの話し合いがもっと必要ではなかったかと反省します。また今後は指導者同志の連携を十分に取っていくことが必要と考えます。

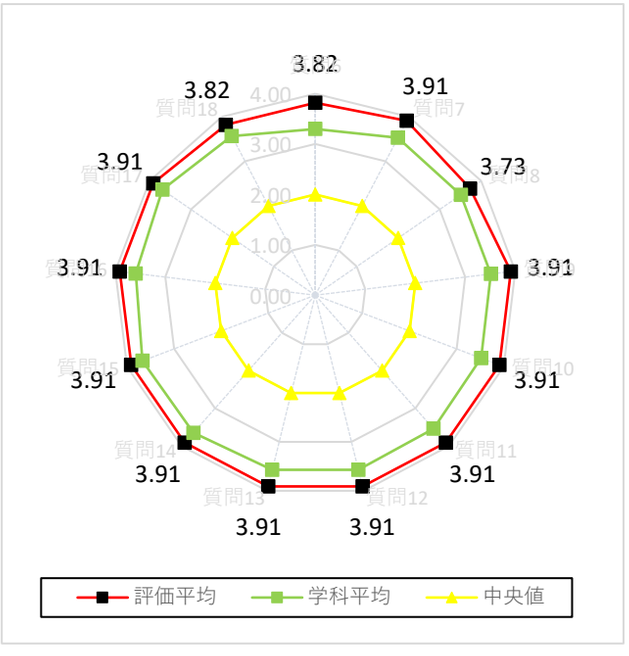
（３）次年度に向けての取り組み

成人看護学実習Ⅰは、手術を受ける患者を対象として、術前・術後看護を展開します。身体侵襲が大きく、急変しやすい時期だけに学生も緊張する実習でもあります。それだけに臨床側との連携を密に取って実習がやりやすいように事前準備をすること、指導者同士の連携をうまくとって学生がより良い学びができるようにやっていきたいと考えます。また臨地実習で患者や看護師達との出会いで、看護する意味や喜びを感じる学生、自分の進む道を決めるきっかけとなる場面に出会ったり、看護を目指す者としての人間的な成長がみられる科目でもあります。今後は学生個々の可能性を見出せるよう、熱心に取り組んでいる姿が見えるよう等、教員としての姿勢を再考し、指導を展開していきたいと考えます。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		成人看護学実習Ⅱ	88名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

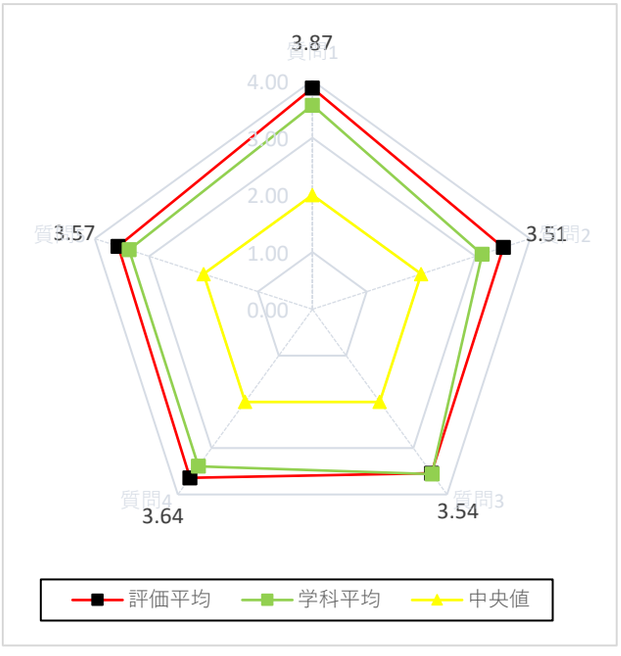
4グループが臨地実習受け入れ中止となり、学内代替実習となった。地域のクリニック医師、看護師長、地域で生活をするDM患者の2名の協力を得て、遠隔での患者への情報収集、カルテ閲覧による情報収集から看護計画立案・教育媒体作成、医師、看護師長とのディスカッション等を取り入れた学内実習を行った。結果、学生は常に熱心に課題にとりくみ、学習成果が上がった。また1週間の見学実習はすべて学内代替実習となった。この1週間を生かし、SCENARIOを活用した看護実践の検討、記録の指導、検査を受ける患者の看護等を行うことにより、事前学習の方法と活用、患者の個別性にを生かした看護実践の計画、実施評価を深く学ぶことができた。しかし、本演習を1グループのみ臨地実習後に行うこととなり、学生からのクレームとなった。実習においては、臨床との連携を図り、個々の学生の能力を引き出し、受け持ち患者への適切な看護実践に向けた指導を行った。学生もよく学習を行い、日々の実習に対しても真摯に取り組んでいた。いずれの学生も受け持ち患者に必要な援助を実践でき、患者や指導者からの評価を得ることができた。

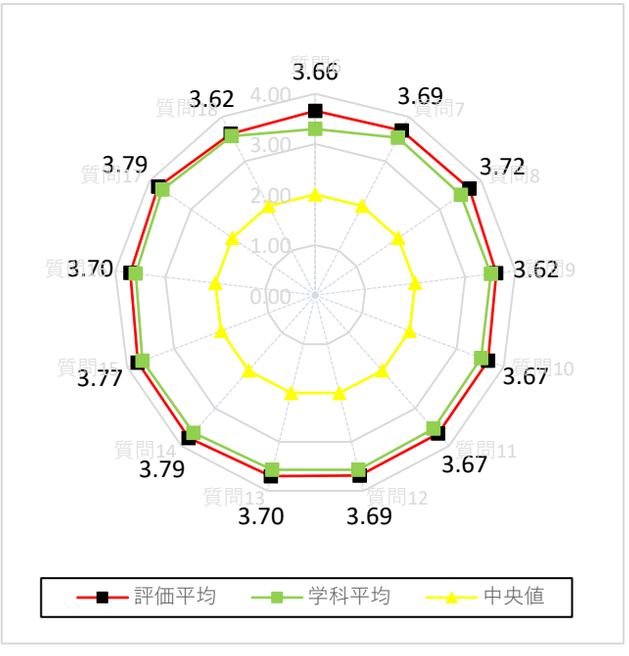
（３）次年度に向けての取り組み

今後も、個別の学生に合わせた指導ができるように実習計画ならびに指導内容を十分検討するとともに、教員間、実習指導者との連携を十分とり、個別学生の成長につなげる指導を実施したい。また最終評価においても、学生に真摯に向き合うこと、ポジティブフィードバックを心がけ、さらなる学生の意欲を高めていけるようにする。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		老年看護学概論	97名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

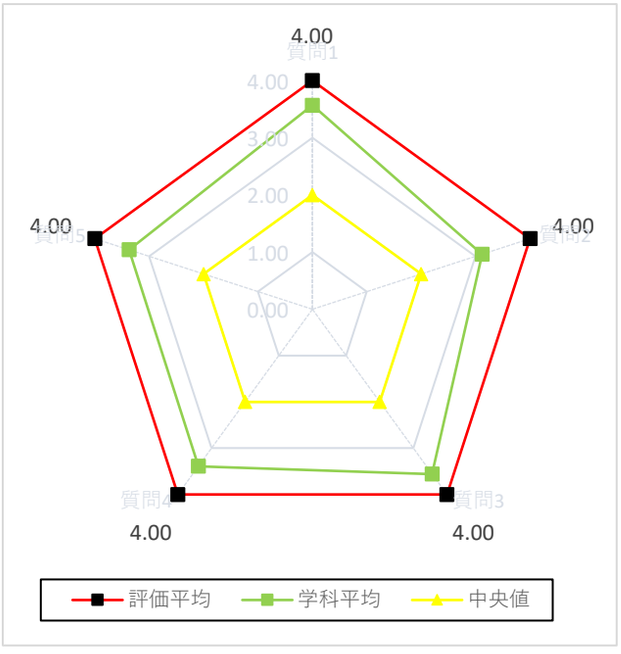
61名の回答があり、平均3.68で、比較的高い得点だと思われる。
遠隔授業でほとんど進めたが、分かりやすくするため、パワーポイントによる共有画面による講義であるため、資料の内容をより具体的に修正を加えた。
また、Zoomでの配信となったため、関心を引くため、領域の教員も加わり交流したり、国家試験問題を入れたりした。
はじめはeラーニングの活用含む小テストも設け、ICT活用を進めた。
遠隔授業で分散にしたので、教室が2つに分かれた点では一部聞き取りにくい面があったようだ。
高齢者模擬体験は7月に行ったが、地域高齢者との交流の演習は今回、感染予防の観点から中止した。
その代替に実家の祖父母と電話等で交流した内容をレポート提出とし、高齢者の理解に多少つなげられ目標達成はほぼできた。

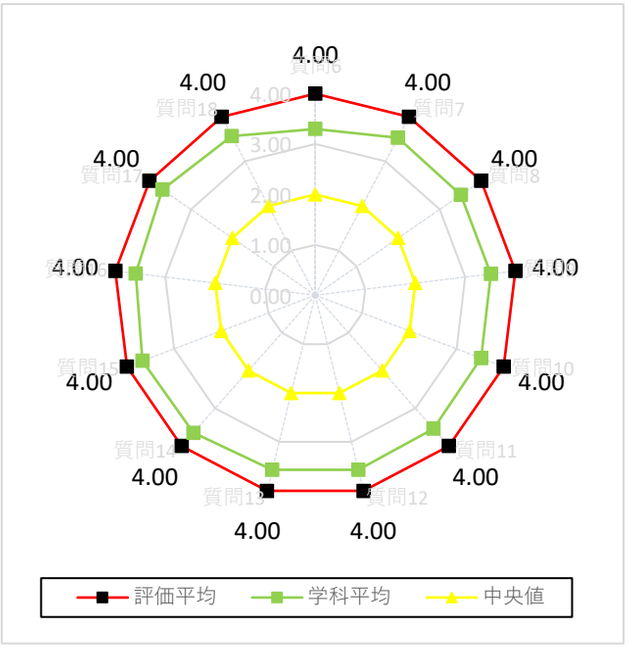
（３）次年度に向けての取り組み

引き続き、遠隔も多いと考えられるので、ワークシートやレポート課題の内容を検討し、目標達成と評価しやすいよう工夫したい。
国家試験問題の提示は学生のこの授業科目・高齢者及び高齢者問題への関心と理解度を高めるため、適時入れるよう継続したい。
また、授業の3コマ単位ごとに入れる小テストも効果的に入れていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		老年看護学方法論	96名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

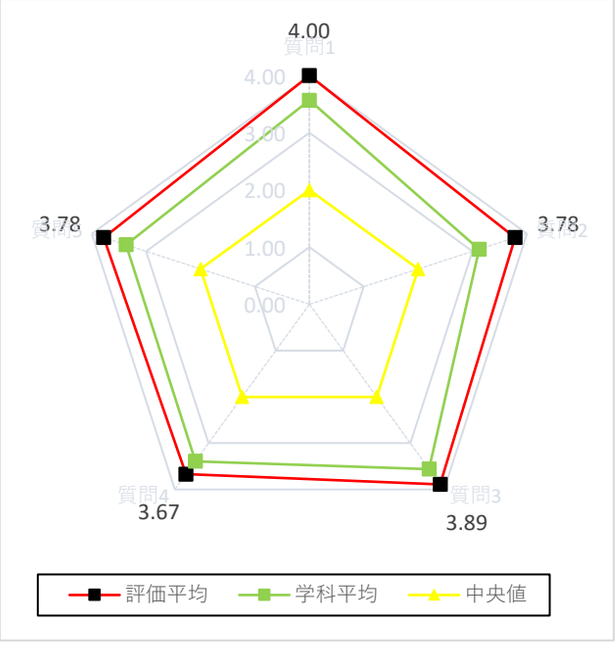
方法論であったので、遠隔より対面授業・分散教室での授業を多くしたが、パワーポイントの資料は修正追加を行い、分かりやすくした。
高齢者に起こりやすい疾病を中心として、国家試験対策も兼ねて、出題傾向の多い疾病や状況設定問題も一部入れた。
全体的に学生はに熱心に受講していた。認知症の援助が実習では多くなるので、演習は多くないので、
もう少し、学生が実習で対応する看護技術を場面設定し、取り入れていく必要があると思う。

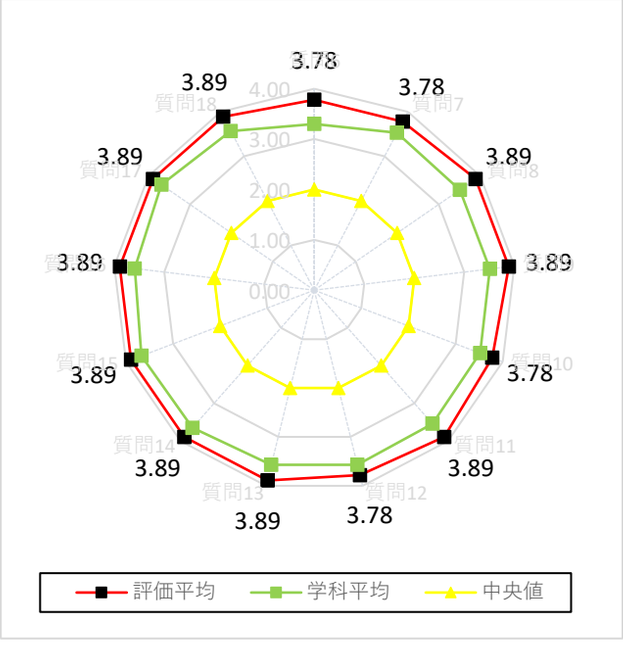
（３）次年度に向けての取り組み

コミュニケーションや嚥下訓練・誤嚥防止の援助・移動動作等についての技術について、もう少し、演習を検討し取り入れていきたい。
時間調整が必要だが、実際の場面がイメージつくように、DVDを効果的に取り入れる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		老年看護学実習	88名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

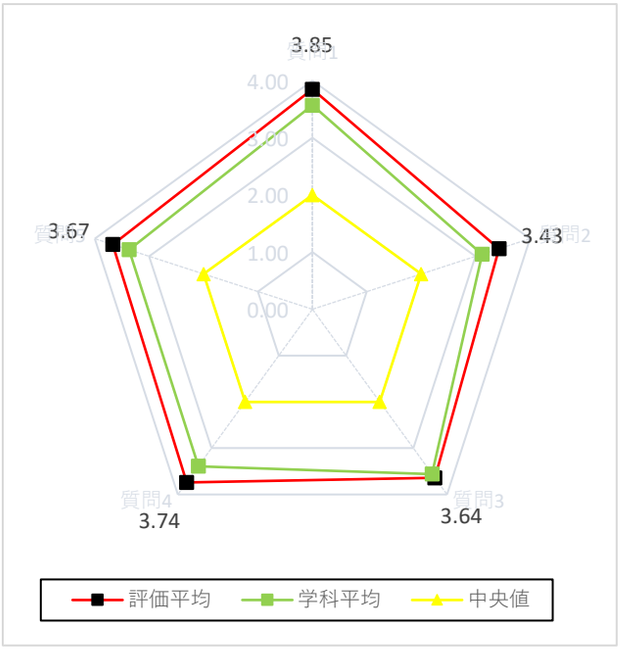
学内実習ト臨地実習が半分ずつの状況であったが、学内実習では模擬患者の活用で実際に実施場面を行い、計画の変更など行い、修正でき、目標達成できた。
アクティビティケアも公民館等に出向き、高齢者を対象にできたことは反応をとらえられ、評価迄できた。
学生も良く取り組んでいた。

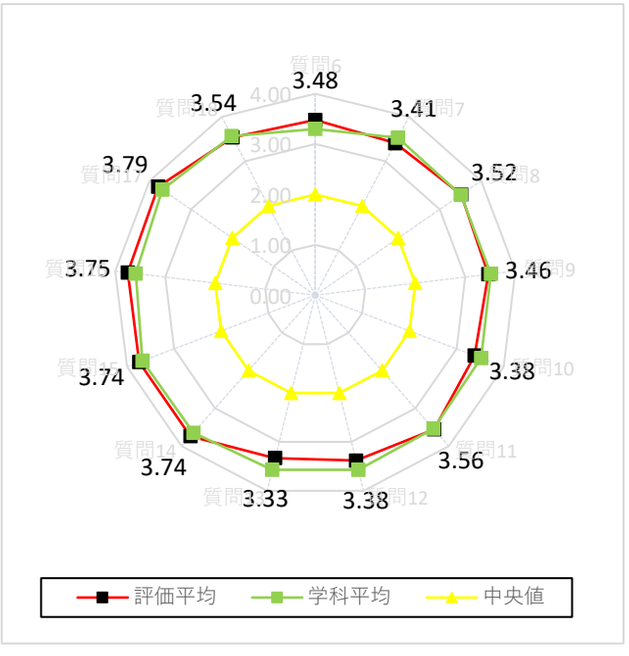
（３）次年度に向けての取り組み

次年度も感染状況においては実習受け、大学周辺の近い地域で開拓したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		精神看護学概論	97名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

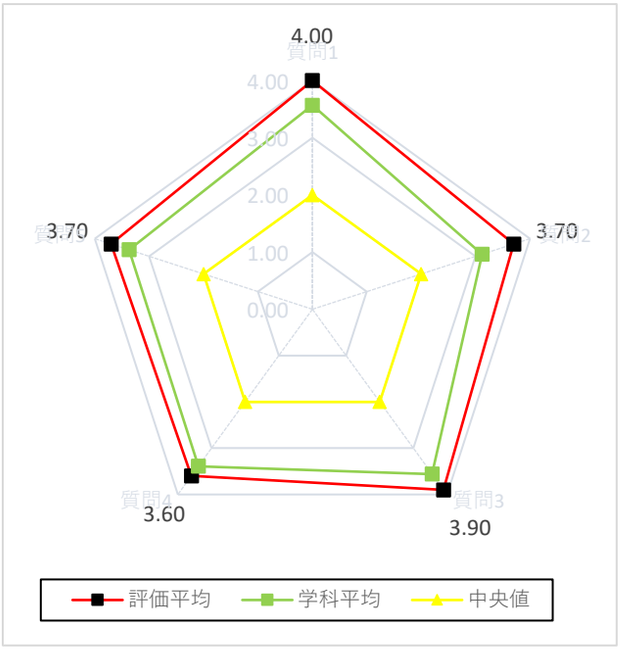
質問7、8、9、10、11、12、13は平均点より悪い。質問10の板書は良くない。

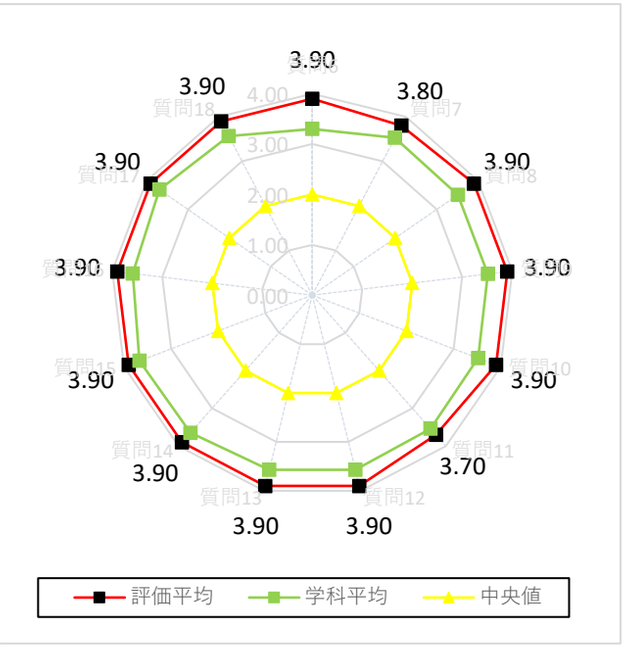
（３）次年度に向けての取り組み

平均点以下のところを反省し、改善したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		精神看護学実習	88名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

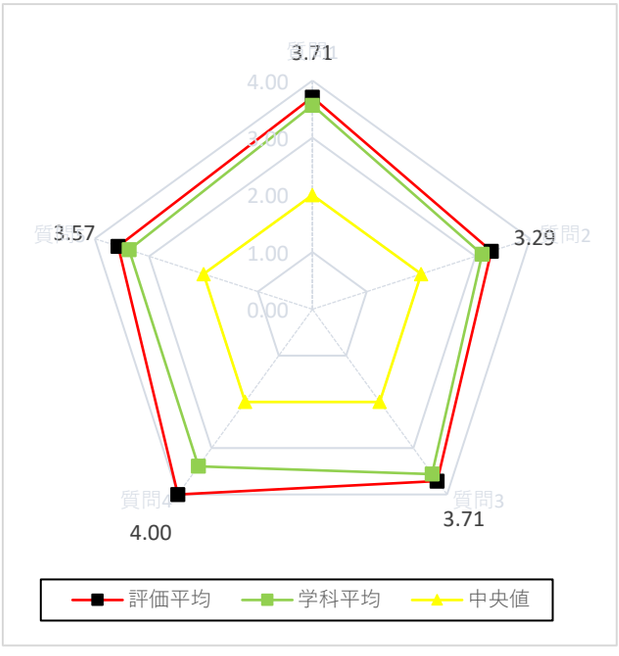
全ての質問は平均値を上回っている。

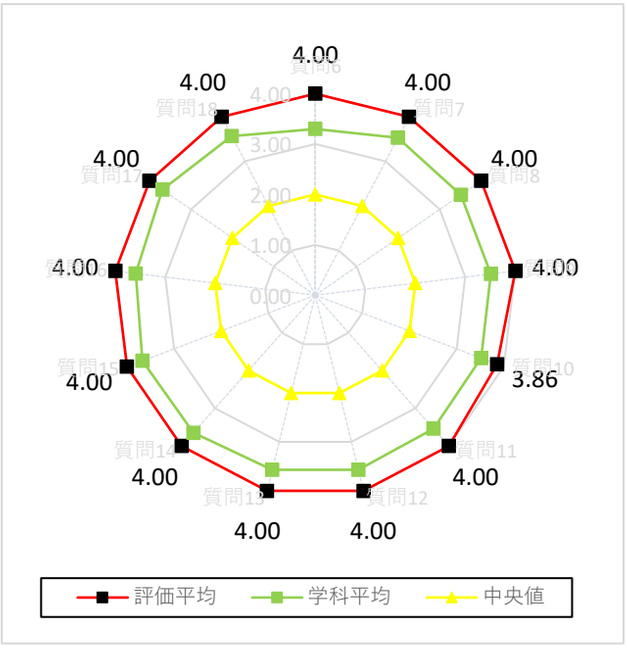
（３）次年度に向けての取り組み

今年度はコロナウイルス感染予防に最重点をおいた。次年度はコロナウイルス感染は勿論だが、学生がインフルエンザ等実習施設に持ち込まないようにしたい。
精神看護学は、他の領域と違い病院、病棟、受け持ち患者さんのイメージができにくい疾患であるため、不安を持って実習に臨むことが多い。実習前のオリエンテーションを徹底したい。実習中は、個別の相談・指導を行い不安感を軽減する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		母性看護学概論	96名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

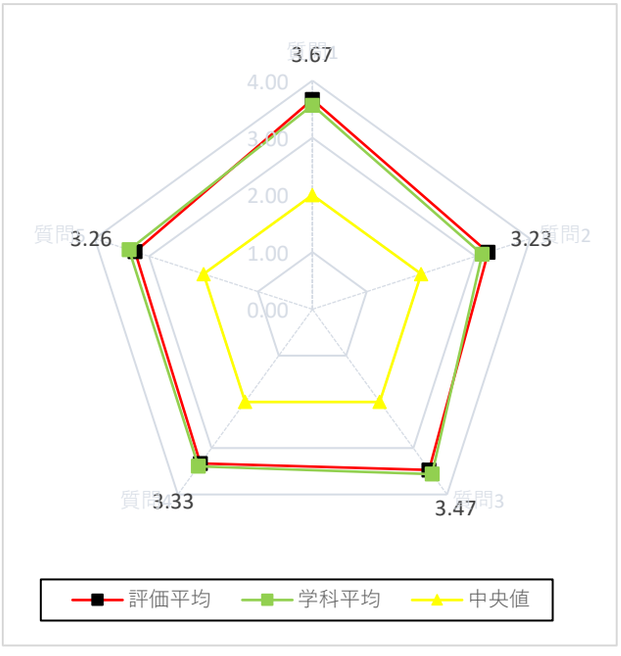
2019年度、お授業における内容を振り返り効果的な内容は継続して、講義に学生が興味を持ってもらうように工夫した。今年度はコロナ禍の中、e-ランニングで事前講義内容や課題を提供し、ZOOMによる講義を実践したことは学生の取り組む準備が整っていたことで効果があったと判断する。また、各授業において各自個人学修の課題を授業ガイダンスでで説明ポートフォリオ形式で事前・事後学習を実践させた。授業最終日に全員提出、その課題に対して評価をすることでテストだけでは見えない個人の能力開発につながったと考える。また、看護はチーム医療の時代である。その為授業スタート時に、チームでダイアローグで個人の意見を聞く意味を行い、さらにグループ編成しテーマを各グループで考えさせて発表を実践し、その評価はグループ毎の評価および教員評価の元常位チームに加点することで内容の高い発表が実施された。定期テストにおいては、前年度半数の学生が再試験であった。前年度は学生の学習態度、学力がどの程度あるか見極めることを優先したことで今年度は改善して再テスト学生は大幅に改善した。次年度においてもこの方法は継承する。

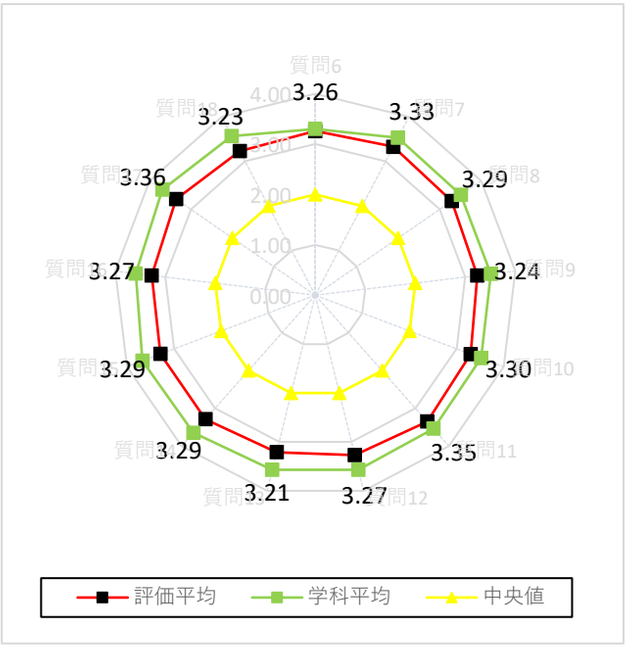
（３）次年度に向けての取り組み

今年度はコロナ禍が継続することを予測し、e-ランニングに変わりteamsで事前講義内容や課題を提供し、講義を実践する予定である。授業ガイダンスで学生の取り組む準備をととのえ、ポートフォリオ形式で事前・事後学習の有効性をさらに説明することで自主的に自己学習能力を高める必要がある。授業最終日に全員提出、その課題に対して評価をすることでテストだけでは見えない個人の能力開発につながったと考える。また、看護はチーム医療の時代である。その為授業スタート時に、チームでダイアローグで個人の意見を聞く意味を行い、さらにグループ編成しテーマを各グループで考えさせて発表を実践し、その評価はグループ毎の評価および教員評価の元常位チームに加点することで内容の高い発表を目指す。しかし、グループ学習の課題としてその課題に取り組む姿勢が積極的に実施する・しないと個人差が出ていたのもゆがめない。今年度はその問題を個々人の持っている力をパズル方式で発揮できるように解決する必要がある。次年度においてもこの方法は継承する。さらに効果的方法を考えて、授業方法は継承しながら、定期テストにおいても前年度の方法を継承する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		母性看護学方法論	88名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

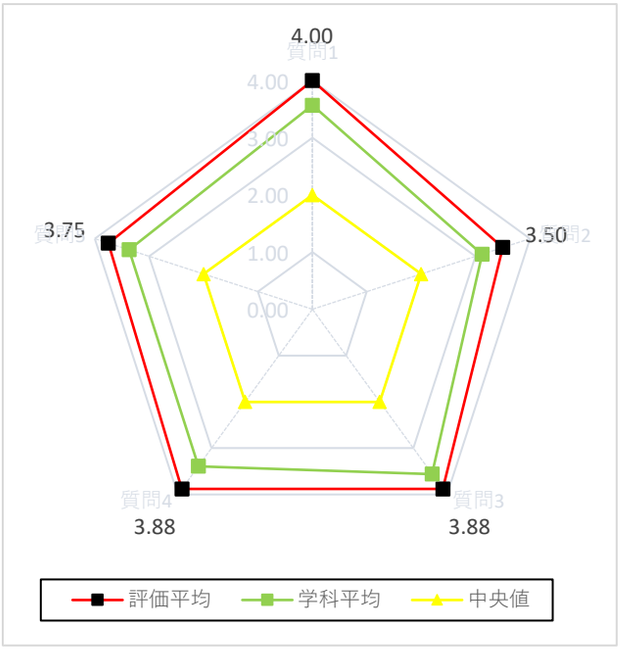
本授業は、①講義（遠隔動画配信・e-learning・Zoom）②看護過程の展開（グループワーク・発表）③実習室での技術演習（少人数での対面演習）で構成し全23コマ実施した。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、急遽、講義は遠隔配信またはZoom配信による2教室に分かれての受講となった。しかし、wifi環境の不安定さにより画像が乱れたり、受信ができなかったりしたため、授業後アンケートに「集中して講義を受講することが難しいこともあった」との意見があった。対面と異なり、教員も学生の理解度の確認が困難な場面が多々生じていた。さらに知識の理解度を確認できないまま、看護過程のグループワークに移行したが、母性看護学という専門科目の看護過程の展開は学生にとって難しく、「課題の多さ」「大変さ」のみが強く印象付けられた結果となった。技術演習は、少人数制の対面演習としたことで教員の指導が行届き、また自己評価と他者評価を取り入れ技術の確認を行ったことの効果が表れ「楽しく実施でき技術習得できた」と高評価であった。双方向の関わりが学生の意欲と満足度を向上させるため、今後も継続して取り組んでいく必要がある。

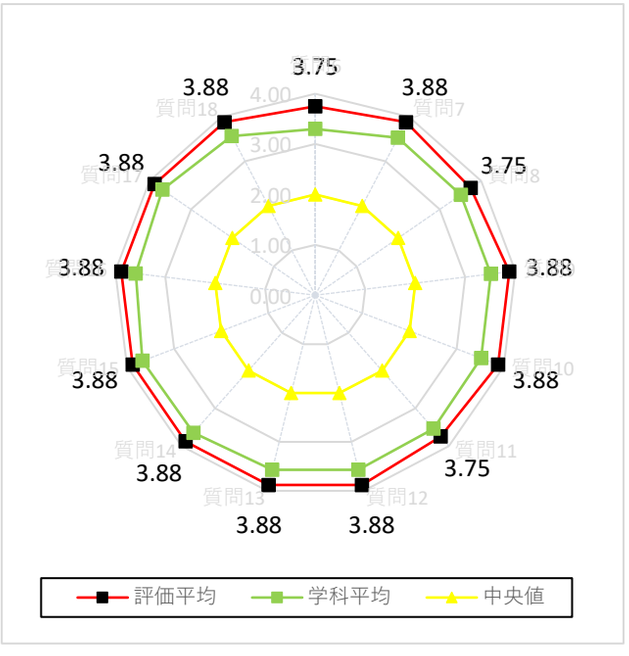
（３）次年度に向けての取り組み

(2)の結果の分析と評価に示したように、まずは学生の専門知識の理解と定着度の確認を随時行っていくことが必要である。そのためには、予習と復習を兼ねた自己学習の推進や単元ごとの小テスト（国家試験問題等）を行い、学生自身が自己の知識の定着度を理解し、自発的に学修に取り組むことができるような支援を行っていく。また、看護過程においては、事例に対する「情報収集」「アセスメント」「看護計画」を個々の学生がじっくりと考え理解し、看護展開につなぐことができるように、課題の量ではなくグループワークやグループ発表に重点をシフトさせ、発表内容に対する講評およびフィードバックの時間を多く設けるようにする。成果物への評価を受けることにより、学生の理解度や学修意欲は向上し、後期の臨地実習への効果も期待できると思われる。技術演習においては、今年度同様に双方向の関わりを大切にし、学生が自主的に学ぶことができるように環境を整え支援していく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		母性看護学実習	88名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

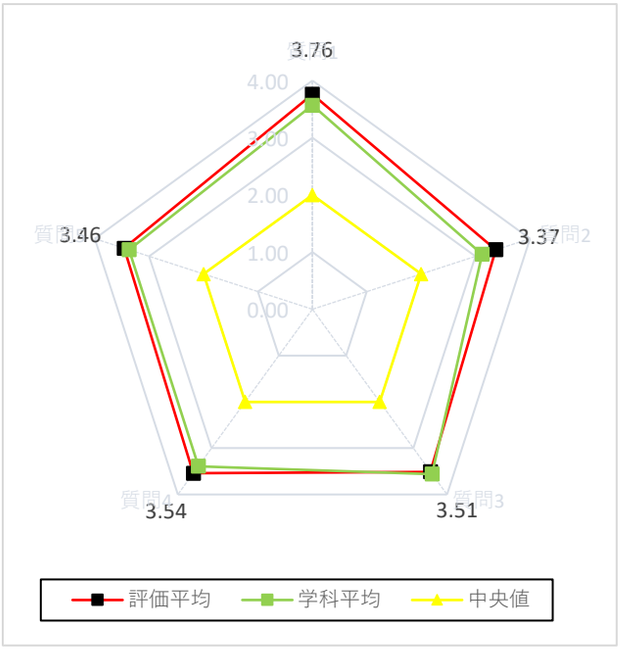
母性看護学実習の実習施設は佐賀県内４ヶ所、長崎県1ヶ所、福岡県1か所での実習予定であった。しかしコロナ禍で実習施設から実習中止の連絡があり、急遽学内実習に切り替えたのが22グループ中、3グループであった。学内実習と施設実習での経験や患者受持ち、さらに提出物の差が出ない工夫を行った。
半数以上の学生は2週間ホテル等宿泊からの実習、教員は宿泊や長距離、授業担当で実習先の往復でかなりハードな実習であった。実習助手の配置がなく、初めての実習施設であり調整や実習施設施設のスタッフとの調整等を行いながら学生の実習環境を整えてきた。学生にとっても大変な中で多くの学生はその環境の中で、施設の特徴を捉え、多くの学びがあった。最終日は学内で各施設での学びを発表することで、施設の患者層の違いや特徴を学び、またアセスメントにおいても考え方で多くの知識を習得できたと考える。最終評価は施設ごとの担当教員での評価ではなく、各学生と教員3名で記録物を確認しながら学生自身の実習で最も学んだ内容を表出させること、担当教員が実習中の学生の実習態度等を述べ、共通認識を持ち各学生を平等に評価する工夫を行った。

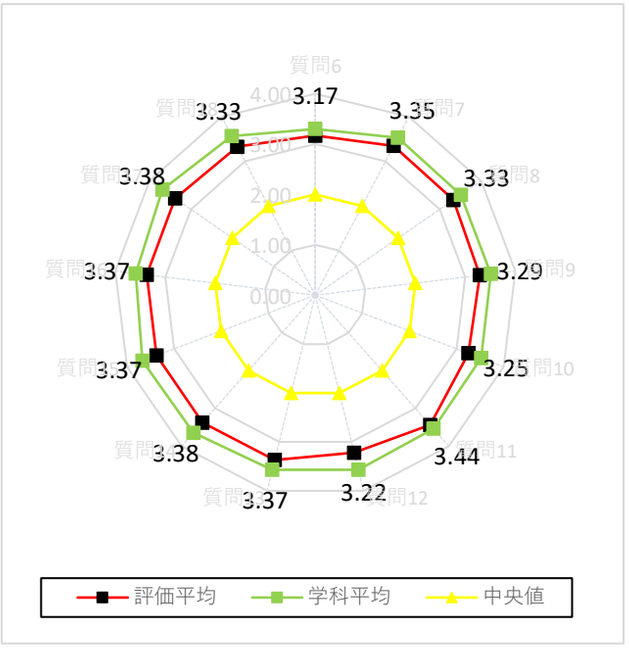
（３）次年度に向けての取り組み

次年度も同様に、母性看護学実習の実習施設は佐賀県内４ヶ所、長崎県1ヶ所、福岡県1か所での実習予定でる。しかしコロナ禍終息が見えない中、実習施設から実習中止の連絡の可能性がある。その為、学内実習内容を再度見直し内容を充実しておく必要がある。今回は学内実習と施設実習の差はほとんどないと考えるが、実践的経験が出来ないことは学生にとっては、卒業後の実践でに影響するのではないかと考える。そのためにも早急な対応としてワクチン接種を希望する。　　また、半数以上の学生・教員の宿泊実習、授業担当で実習先の往復でかなりハードな実習の解決を考えていきたい。教員一名が欠員となり実習助手を早急確保、実習体制を整えていただきたい。今年度は実習施設は2年目となり学生の実習環境をさらに充実したい。学内評価は前年度と同様な方法で各施設で発表を実施し、さらに知識習得の場とする。また、最終評価は施設ごとの担当教員での評価ではなく、各学生と教員3名で記録物を確認しながら学生自身の実習で最も学んだ内容を表出させ、担当教員が実習中の学生の実習態度等等で総合的な評価を、共通認識を持ち各学生を平等に評価を行う予定である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		小児看護学方法論	88名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

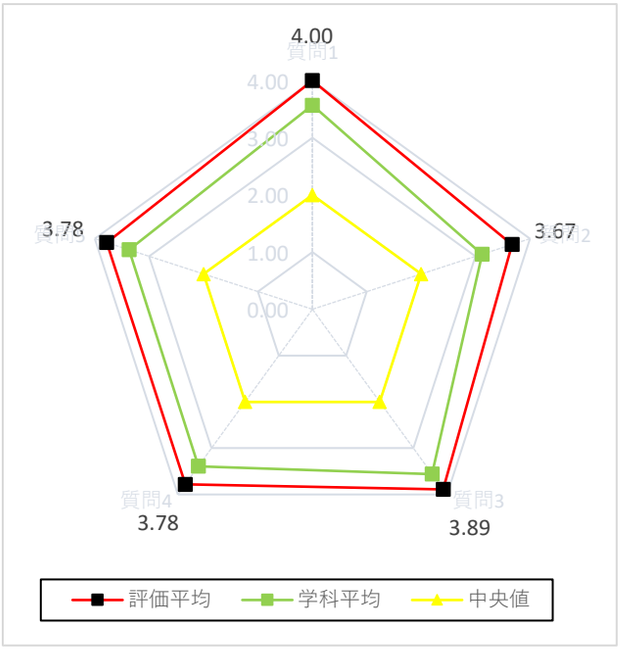
小児看護学方法論に関しては、4月から遠隔授業がスタートとなり、慣れない環境の中で学生さんが分かりやすく、聞き取りやすい授業を展開することが難しかった。そのため、授業評価も多くの項目で評価平均を下回るという結果となった。
また、

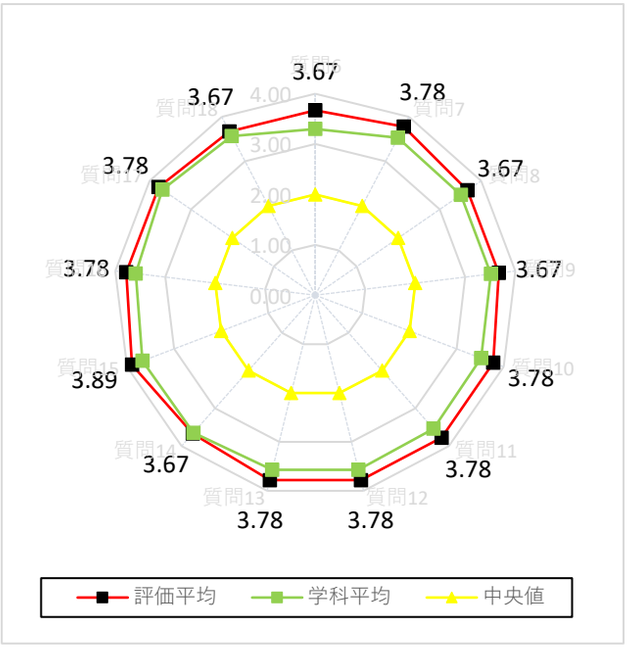
（３）次年度に向けての取り組み

今年度は、遠隔授業における授業において、声が聞き取りやすいかや分かりすらいところはないなどを適宜確認しながら、聞き取りやすい授業を心掛けようと思う。また、学生さんの質問には誠実に答え対応していこうと思う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		小児看護学実習	88名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

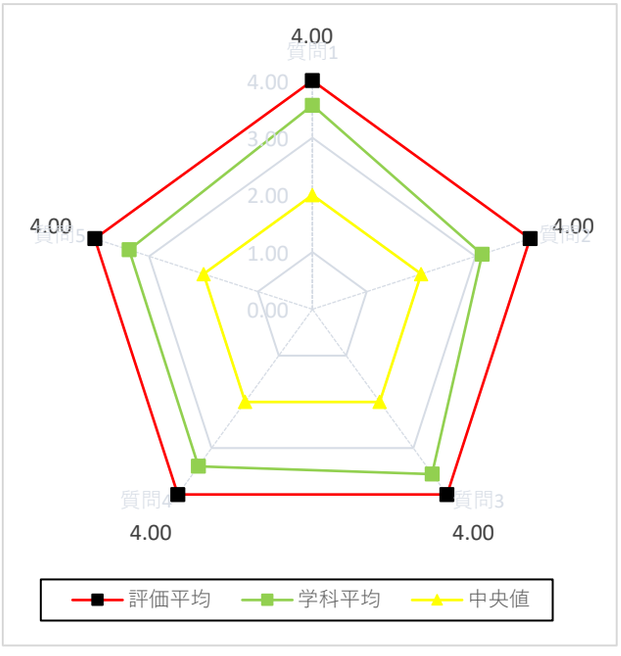
小児看護学実習に関しては、実習先の協力を得ながら充実した実習にすることができたと考える。
学生の評価は、評価平均をほぼすべての項目で上回っており、評価は高い。

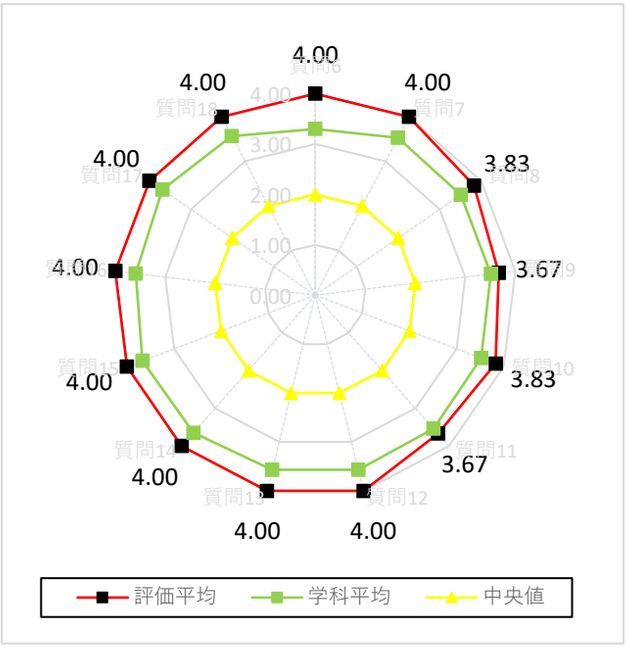
（３）次年度に向けての取り組み

次年度も引き続き双方向の実習指導を心掛け、学生に対応していきたいと考える。
学生の半分以上は重症心身障碍児施設に実習に行ったが、学生の学ぶ環境（参考書の準備）が必ずしも整っていたとは
言えないため、今年度は昨年度の反省を踏まえて準備していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		関連職種連携論	95名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

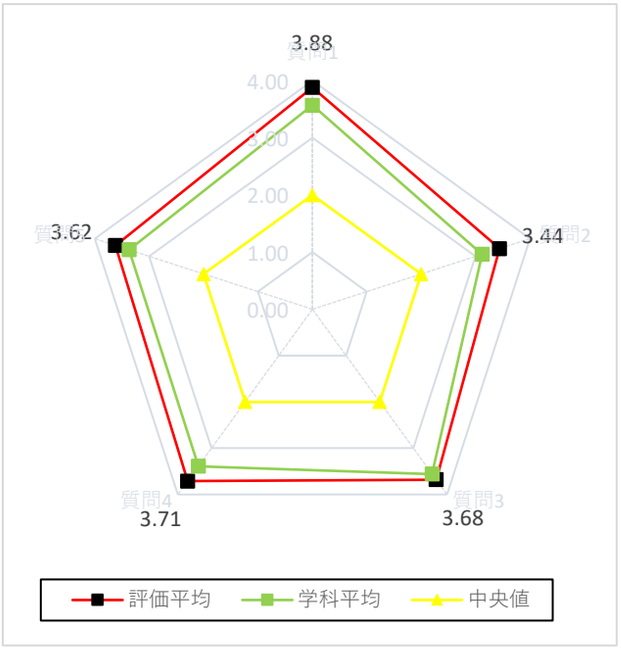
コロナ禍により遠隔授業となった。科目目的と位置づけから多くの教員が専門性の高い講義を実施した。そのためには、教員間で科目目的と担当する講義の関連付けを確認し、実際の授業展開を行った。事前学修課題、事後学修課題により、授業の参加度、理解度を高めた。講義内でも、事例を活用すること、各学生が考えること、意見交換することにより、理解が深まるように計画実施した。

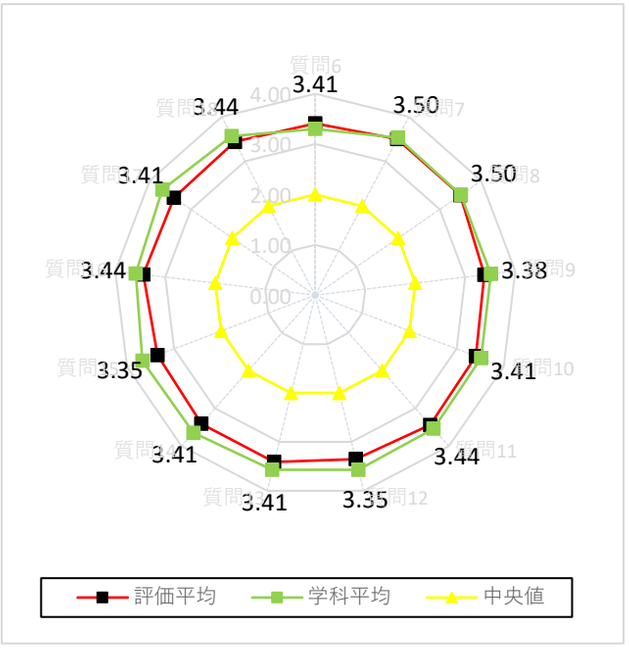
（３）次年度に向けての取り組み

今後の保健医療福祉の分野では多職種連携が必須である。基本的な知識、考え方を身につけ、求められる専門職としての行動につながるよう内容の充実とともに、各授業内で学生が主体的に取り組むことができるよう、アクティブな講義を検討したい。さらには、演習・実習、卒後の専門職者としえの活動において有用な内容を展開できるよう教員も努力を重ねる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		関連職種連携演習	49名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

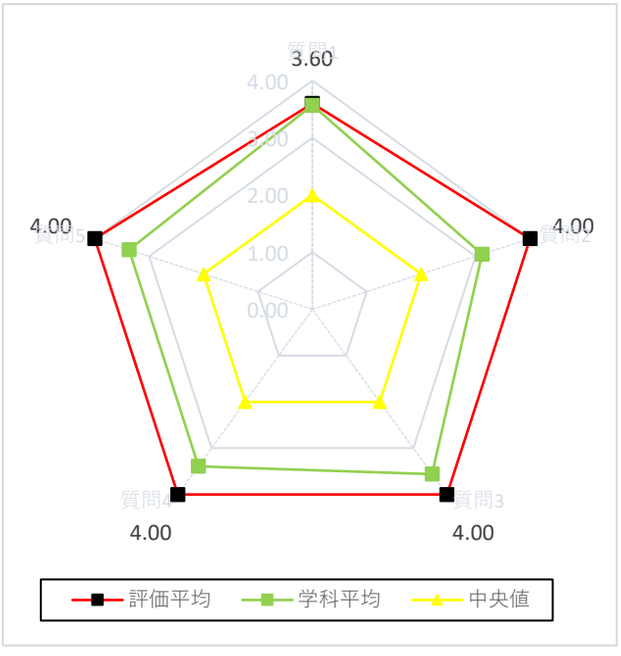
コロナ禍での演習となり、ZOOMを使った遠隔での実施となった。社会福祉学科、心理カウンセリング学科、看護学科と３学科での合同で、チュートリアル式のグループワーク・演習が主であったが、グループごとに割り当てられた事例に沿って、他学科の学生がお互いに意見交換ができ、学習を深メルコとができた。また、理学療法学科、栄養学科、子ども学科の先生方のご協力もあり、専門的観点からの助言・指導があり、職種間連携の必要性が学びに結びついていた。本来なら、対面式のグループワーク・演習も計画していたが、コロナの影響でできなかったことが、学生の評価にもつながっていたのではないかと考えられる。

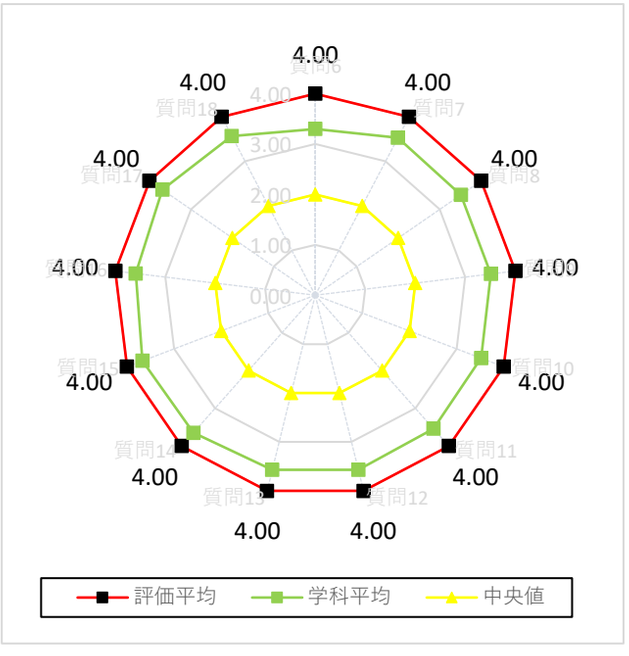
（３）次年度に向けての取り組み

リハビリ学部、栄養学部、こども学部など、他学部の参加が出来れば、さらに学びが深まる演習となるが、現実的には難しい現状であるため、今後は、他学部の先生方とも検討し、参加できるような時間的配慮が必要である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		家族看護学	84名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

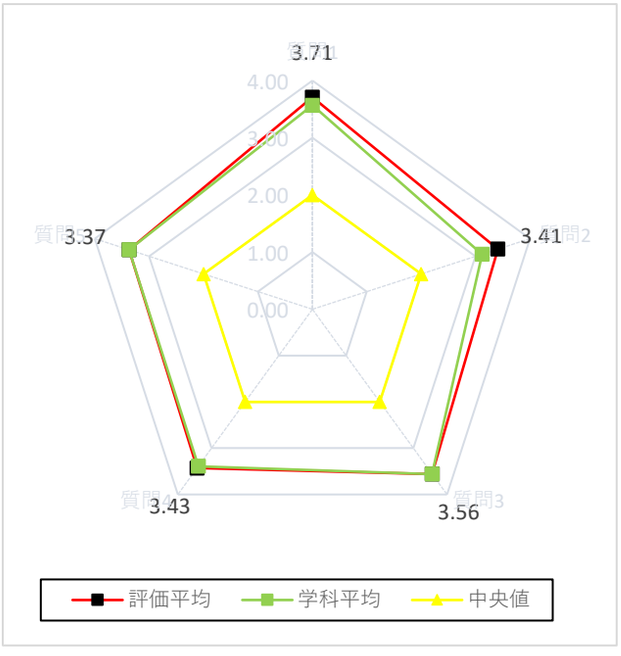
回答者は84名中5名であった。失格者3名。成績は平均77.9点であった。
授業の取り組む姿勢（質問2～5）については、平均4.0であり、真剣に取り組めたと評価できる。単元により担当者が変わるオムニバス形式であったことより、学生も緊張感を保持しながら受講できたのではないかと考える。
欠席（質問1）した者がいたが本科目は選択科目であり初回授業開始前に対象学生に科目の説明をおこなう時間が十分取れなかったことが原因として考えられる。失格者は出席日数の不足のため受験失格となった者2名、退学希望者1名であった。
質問6～18については平均4.0だった。単元に合わせて予習・復習レポートを課したことにより、学修内容を深めたり知識の定着が図れたと捉えることができる。補助教材として教員は毎回パワーポイントの資料やレポート用紙を配付していたが授業中、教科書忘れや購入していない学生が目立った。
今年度は、新型コロナ感染対策として資料の配布やレポートの提出などを極力控え、E-leaningシステムを活用した。ペーパーレスによる紙の節約は経費削減に回収レポートの集計時間の短縮化につながった。

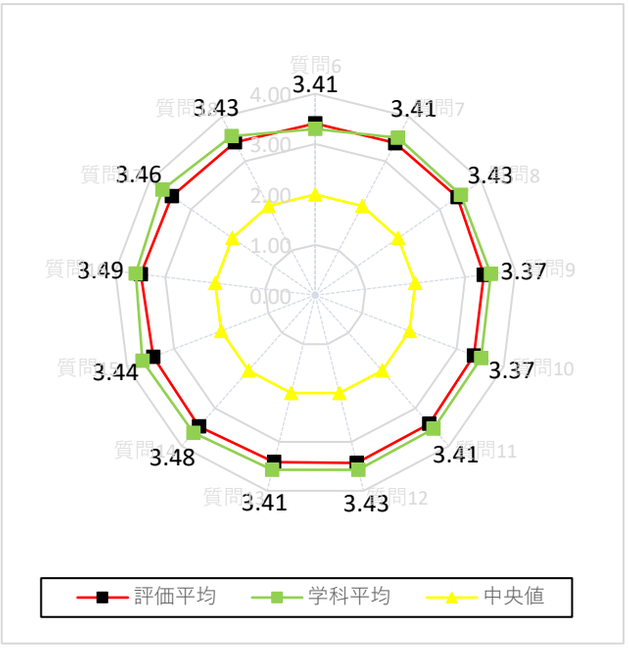
（３）次年度に向けての取り組み

本科目は選択科目ではあるが、在宅看護学をはじめ各専門領域で看護支援や退院調整を行う上で、重要となる家族アセスメントの知識・技術が修得できる科目である。履修ガイダンス等で科目の内容や学修の意義について説明し、受講を促すことが必要である。また、基礎的知識の理解も大切であるため、初回からの出席を促すことや教科書持参が必須であることなどを伝えていく。
また、講義内容については学生の興味・関心や知的好奇心が湧くよう再考したり、協同学習を取り入れるなど、失格者が減るよう工夫していきたい。
次年度よりE-learningからteamsに変更予定であるが今年度同様、資料配布やレポート回収などに活用し、効果的な授業方法を模索していきたい。
授業評価は、自己の授業を客観的に振り返る貴重な参考資料であるため、授業終了時やポータルサイトで周知するなどし、回答協力の学生数が増えるよう努めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		看護研究方法論	88名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

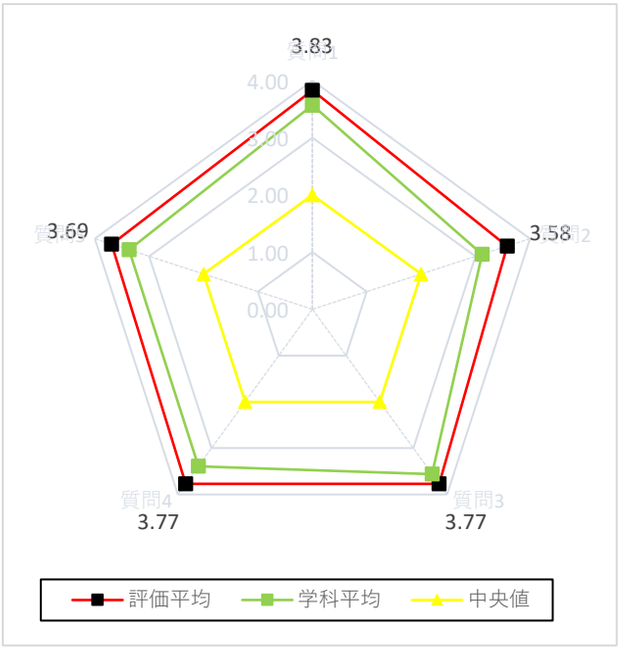
コロナ禍での講義・演習となり、ZOOMを使った遠隔での実施となった。講義演習形式は、ZOOMを使用した遠隔式の講義を中心に行い、図書館の司書の方にも協力いただき、遠隔式文献検索オリエンテーション実施、また4部屋の教室に分散し、グループワークを通しての文献クリティーク演習を2コマ行えた。最終的に文献クリティークを通して、各自に研究テーマに沿った研究計画を作成してもらい、遠隔式で発表となった。文献検索オリエンテーションは、コロナの緊急事態宣言のため動画視聴形式へ切り替えたが、閲覧していない学生が数名見られた。そのため、図書館で文献検索エンジン（医学中央雑誌、CINIなど）を活用した文献を調べる、学外へ文献を請求するということを行った学生はいなかった。ほとんどの学生が単純にインターネット経由での文献検索をしていた。動画視聴式、遠隔式では、特に文献検索方法などの技術習得が難しい面もある。また評価にもあるように双方向的なやり取りでの授業評価に課題が残る。

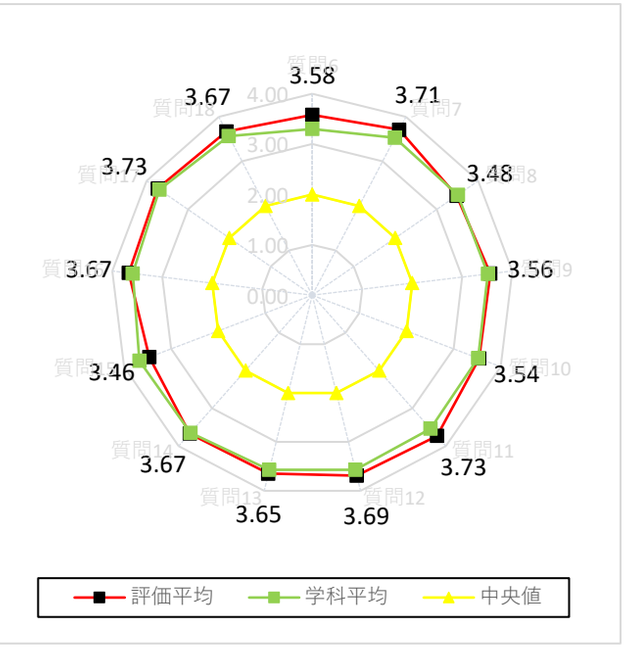
（３）次年度に向けての取り組み

文献検索オリエンテーション、グループワークについては対面での授業方法を念頭にすすめていき、e-learningやチャットをもう少し積極的に取り入れ、双方向的な授業と学生、教員間のコミュニケーションのやり取りを積極的に増やしていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		学校保健概論	67名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

この授業は、看護学科にて保健師課程と教職課程を希望する学生の必修科目である。昨年度に続き、それ以外の学生も多く受講（選択）していた。

今年度はコロナ禍で、半分の授業が遠隔授業になり、後半の対面での授業でもグループワークはできなかった。そこで、学生が子どもの健康や安全に興味関心を持ち、保健教育や保健管理の実務を学べるように、配付資料や授業内容の精選を行った。その結果、質問11の「配布資料が役立ったか」の高評価につながったのではないかと思う。

また、前半の課題提出型の授業では、子どもの健康課題を中心に課題を出し、コメントをする中で、質問等も多く寄せられた。後半の対面授業では、個人演習や授業外レポートを通して、保健教育や保健管理の実務について学校現場での様子を多く語った。その結果が、質問11の「教員は熱心に授業に取り組んでいたか」の高評価に表れていると思う。

全体として、授業評価では全項目において3.5～3.7の高評価を得た。また、課題作成の苦労はあったようだが、学生自身の自己評価も3.6～3.8と高く、自身の授業への取り組みへの満足度も高かったように思う。

（３）次年度に向けての取り組み

引き続き、子どもの健康や安全に関する課題（トピックス）を取り上げ、学童期から青年期の児童生徒等の健康や安全、社引き続き、子どもの健康や安全に関する課題（トピックス）を取り上げ、学童期から青年期の児童生徒等の健康や安全、社会の有り様に関心を持つように意識づけていきたい。具体的には、学校保健の３領域の保健教育や保健管理、組織活動の実務について、講義や個人演習を通して学び、また学生間の相互の学びあいが進むように配付資料や授業の内容を検討し、活気のある授業を行っていきたい。〞会の有り様に関心を持つように意識づけていきたい。具体的には、学校保健の３領域の保健教育や保健管理、組織活動の実務や学校保健と地域保健の連携などについて、講義や個人演習を通して学び、また学生間の相互の学びあいが進むように配付資料や授業の内容を検討し、活気のある授業を行っていきたい。〞